

内地研修員

氏名	所属・身分	期間	研究課題
安野 早己	山口県立大学国際文化学部教授	1994. 10. 1 ～95. 3. 31	人類学と古典文献学の共同によるポピュラー・ヒンドゥイズムの総合的研究
谷垣真理子	東海大学文学部講師	1995. 4. 1 ～96. 3. 31	「港人治港」と香港の政治体制－1997年返還に向けての香港の政治権力再編成過程を中心として
仲川 恭司	専修大学文学部教授	1995. 4. 1 ～96. 3. 31	秦漢瓦当の総合的研究

5. 海外との図書の寄贈・交換

海外の研究機関と、『東洋文化研究所紀要』、『東洋文化』、『センター叢刊』等の本研究所発行の図書の寄贈および交換を行っている。寄贈および交換先は39カ国、199機関に及んでいる。なお、国内については285機関と寄贈・交換を行っている。

G 学内教育参加

1. 大学院教育

研究所（協力）講座

当研究所は五つの研究科に次の講座を設置し、大学院教育を行っている。

研究科	専攻	講座名
人文社会系	基礎文化研究	東アジア美術史学
	アジア文化研究	比較アジア社会文化論・東アジア社会文化論・南アジア社会文化論・西アジア社会文化論
総合文化	超域文化科学	比較民族誌
	地域文化研究	環インド洋地域文化研究
経済学	現代経済	アジア経済
法学政治学	政治	学際政治学

大学院担当教官

講義を担当している教官は次の通りである。

1994年度

研究科	専攻	担当教官
人文科学	中国語中国文学	岡本・丸尾
	東洋史学	濱下・宮嶋・松丸・平勢・鈴木・羽田
	中国哲学	岡本・松丸・平勢・蜂屋・丘山
	印度哲学印度文学	丘山・上村・永ノ尾
	イスラーム学	後藤・鎌田
	美術史学	小川
法学政治学	政治	猪口・田中・鈴木
経済学	理論経済学・経済史学	加納
	現代経済	柳澤
総合文化	比較文学比較文化	岡本
	地域文化研究	松井・柳澤・鈴木・羽田・後藤
	国際関係論	原・田中
	文化人類学	末成・関本・松谷
理学系	地理学	松井
農学生命科学	農業経済学	原

1995年度

人文社会系	基礎文化研究	小川
	アジア文化研究	岡本・濱下・宮嶋・平勢・蜂屋・丘山・丸尾・中里・上村・永ノ尾・鈴木・松谷・羽田・後藤・鎌田
法学政治学	政治	猪口・田中・鈴木
経済学	理論経済学・経済史学	加納
	現代経済	柳澤・長澤
総合文化	比較文学比較文化	岡本
	地域文化研究	松井・柳澤・中里・鈴木・長澤・羽田・後藤

	国際関係論	原・田中
	文化人類学	末成・関本・松谷
理学系	地理学	松井
農学生命科学	農業経済学	原
1996 年度		
人文社会系	基礎文化研究	小川
	アジア文化研究	岡本・濱下・宮崑・平勢・蜂屋・丘山・丸尾・尾崎・中里・上村・永ノ尾・鈴木・松谷・羽田・後藤・鎌田
法学政治学	政治	猪口・田中・鈴木
経済学	現代経済	加納・高橋・柳澤・長澤
	経済史	加納
総合文化	超域文化科学	末成・関本・岡本
	地域文化研究	松井・柳澤・中里・鈴木・長澤・羽田・後藤
	国際社会科学	原・田中
理学系	地理学	松井
農学生命科学	農業・資源経済学	原

2. 学部教育

講義を担当している教官は次の通りである。

1994 年度		
文学部	平勢・蜂屋・丸尾・小川・鈴木・鎌田	
農学部	原	
教養学部	原・田中・末成・関本・丸尾・加納・柳澤・上村・鈴木・鎌田	
1995 年度		
文学部	蜂屋・丸尾・小川・中里	
経済学部	加納	
農学部	原	
教養学部	田中・末成・関本・加納・柳澤・中里・上村	

H 刊行物一覧

1. 東洋文化研究所紀要

第125冊(1994年11月)

西周中期以降における青銅器製作の背景	竹内 康浩
客省荘文化の成立について	李 権生
明清期畿輔水利論の位相	黨 武彦
魯迅の祖父周福清攷(六)——その家系、生涯及び人物像について	松岡 俊裕
コスモロジーの類型論——民俗分類の視点から	松井 健

第126冊(1995年1月)

『馬王堆漢墓帛書周易』要篇の思想	池田 知久
宋代断例考	川村 康
ベトナムの東南アジア地域認識——1975年～1986年	白石 昌也
Some Remarks on Tirumāl/Visṇu Cult in Early Tamil Religion and Literature*——With Special Reference to the Tirumāl Odes of the <i>Paripāṭal</i>	Hiroshi Yamashita
初期パンチャラートラ聖典の周辺——Ratna-traya	松原 光法
DHVANYALOKA 訳注 補遺(1)	上村 勝彦

第127冊(1995年3月)

『如来興顯経』の研究	河野 訓
戯曲 本色 文学——明代後期の戯曲評論	廣瀬 玲子
De la modernisation de la société à la modernisation des religieux (Le cas de l'Iran)	Sadria Modjtaba
『アル＝シャーフィイー師の道(学派)に則って 宗教学を初めて学ぶ者の悦び』訳注(1)	中田 考
ケーシャヴダースの“カヴィ・ブリヤー”第1章・第2章——17世紀インドの修辞学書・序章、史料として	水野 善文
ガンダーラ美術後期の片岩彫刻とハイル・ハネー出土の	

大理石彫刻の製作年代	田辺 勝美
タイの経済発展と資本浅化	新谷 正彦
ベトナムの「家譜」	未成 道男
松丸道雄教授 略歴・主要著作目録	
第128冊 (1995年11月)	
魯迅の祖父周福清致(七)——その家系、生涯及び人物像について	松岡 俊裕
『アル=シャーフィイー師の道(学派)に則って 宗教学を初めて学ぶ者の悦び』 訳注(2)	中田 考
ナンブーディリ・バラモンのカースト改革運動を考える	粟屋 利江
後期パンチャラートラ聖典の周辺	松原 光法
タイとマレーシアにおける経済発展: 1965~1990年 ——スカイライン図より見た比較研究	新谷 正彦
述語補語統合型の統合意義特徴 ——動詞と形容詞との組み合わせを対象として	大滝 幸子
第129冊 (1996年2月)	
先秦期における単字模鑄造法について ——曾侯乙墓出土青銅器群を中心に	吉開 将人
六朝道経の形成とその文体 ——上清経の場合	神塚 淑子
宋代社会と物語	大塚 秀高
蘇青論序説 ——『結婚十年』が書かれるまで	櫻庭ゆみ子
キジルバシュのその後——17~19世紀 オルミエ地方のアフシャール部	近藤 信彰
パンチャラートラ・サンヒターの聖典内容	松原 光法
DHVANYĀLOKA 訳注 補遺(2)	上村 勝彦
状語中心語統合型の統合意義特徴 ——形容詞と動詞の組み合わせを対象として	大滝 幸子
第130冊 (1996年3月)	
珠江デルタの地域社会——新会県のばあい、続	西川喜久子
ソグド美術における東西文化交流 ——獅子に乗るナナ女神像の文化交流史的分析	田辺 勝美
An Interpretation of <i>Baudhāyana-dharmasūtra</i> 2, 11, 26	Ryutaro Tsuchida

講史小説と歴史書(1)——『三国演義』、『隋唐両朝史伝』を中心に	上田 望
北朝鮮における計画経済の基礎——初期の北朝鮮に おける経済に関する法の制定過程	藤井 新

2. 東洋文化

第75号(1995年2月)特集“比較文化の方法——アジアの視角から”	
歴史研究における比較と関係	加藤 祐三
ギリシア美術の日本仏教美術に対する影響——ヘルメース神像 と(兜跋)毘沙門天像の羽翼冠の比較	田辺 勝美
明治の須弥山説論争	吉田 忠
中華における比較文化的意識の特徴	岡本 さえ
進化と文明——近代中国における東西文明比較の問題について	佐藤 慎一
世界秩序・政治単位・支配組織——比較のなかの 後期イスラム帝国としてのオスマン帝国	鈴木 董
経済発展の地域性——その解明をめざす方法論的覚え書き	原 洋之介

第76号(1996年1月) 特集“東アジアにおける人類学と歴史研究”	
人類学と歴史研究	末成 道男
事実と認識——日本からの視点	宮永 國子
そこにある死体——事件理解の方法	上田 信
中原逐鹿考	桐本 東太
中国人の族譜と歴史意識	瀬川 昌久
族譜より見た畚族の親族制度	王 崧興
清末・民国期、珠江デルタ順徳県の集落と「村」の領域 ——旧中国村落の再検討へ向けて	片山 剛
朝鮮時代後期の村落構成の動態——大丘戸籍の分析	嶋 陸奥彦

3. 東洋文化研究所研究報告（*印は在庫なし）

- *1. 仁井田 陞『中国の農村家族』1952
- *2. 周藤 吉之『中国土地制度史研究』1954
- *3. 泉 靖一・斎藤 廣志『アマゾン その風土と日本人』1954
- *4. 大林 太良『東南アジア大陸諸民族の親族組織』1955
- *5. 結城 令聞『世親唯識の研究 上』1956
- *6. 関野 雄『中国考古学研究』1956
- *7. 窪 徳忠『庚申信仰』1956
- *8. 江上 波夫他『館址 東北地方における集落址の研究』1958
- *9. 仁井田 陞『中国法制史研究 刑法』1959
- *10. 仁井田 陞『中国法制史研究 土地法・取引法』1960
- *11. 米澤 嘉圃『中国絵画史研究』1961
- *12. 結城 令聞『唯識学典籍志』1962
- *13. 仁井田 陞『中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法』1962
- *14. 築島 謙三『文化心理学基礎論』1962
- *15. 窪 徳忠『庚申信仰の研究 年譜篇』1962
- *16. 仁井田 陞『中国法制史研究 法と慣習・法と道德』1964
- *17. 鎌田 茂雄『中国華嚴思想史の研究』1965
- *18. 江上 波夫『アジア文化史研究 要説篇』1965
- *19. 泉 靖一『济州島』1966
- *20. 江上 波夫『アジア文化史研究 論考篇』1967
- *21. 鈴木 敬『明代絵画史研究 浙派』1968
- *22. 窪 徳忠『庚申信仰の研究 島嶼篇』1969
- *23. 中根 千枝『家族の構造 社会人類学的分析』1970
- *24. 窪 徳忠『沖縄の習俗と信仰』1971
- *25. 川野 重任『農業発展の基礎条件』1972
- *26. Nakamura Kojiro, *Ghazali on Prayer*, 1973
- *27. 窪 徳忠『増訂 沖縄の習俗と信仰』1974
- *28. 鎌田 茂雄『宗密教学の思想史的研究』1975
- *29. 松井 透『北インド農産物価格の史的研究 1861～1921年』1977
- *30. 荒 松雄『インド史におけるイスラム聖廟 宗教権威と支配権力』

1977

- *31. 池田 温『中国古代籍帳研究 概観・録文』1979
- *32. 田仲 一成『中国祭祀演劇研究』1981
- *33. 松丸 道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』1983
- *34. 田仲 一成『中国の宗族と演劇 華南宗族社会における祭祀組織・儀礼
及び演劇の相関構造』1985
- *35. 鎌田 茂雄『中国の仏教儀礼』1986
- *36. 松井 透『イギリス支配とインド社会
19世紀前半北インド史の一研究』1987
- *37. 鎌田 茂雄『新羅仏教史序説』1988
- *38. 斯波 義信『宋代江南経済史の研究』1988
- *39. 田仲 一成『中国郷村祭祀研究 地方劇の環境』1989
- *40. 濱下 武志『中国近代経済史研究 清末海関財政と開港場市場圏』1989
- 41. 上村 勝彦『インド古典演劇論における美的経験
Abhinavagupta の rasa 論』1990
- 42. 宮嶋 博史『朝鮮土地調査事業史の研究』1991
- 43. 柳澤 悠『南インド社会経済史研究
下層民の自立化と農村社会の変容』1991
- 44. Matsutani Toshio ed., *Tell Kash kashok*
The Excavations at Tell No. II., 1991
- 45. 山田 三郎『アジア農業発展の比較研究』1992
- *46. 蜂屋 邦夫『金代道教の研究 王重陽と馬丹陽』1992
- *47. Tomosugi Takashi, *Reminiscences of Old Bangkok:*
Memory and the Identification of a Changing Society, 1993
- *48. 田仲 一成『中国巫系演劇研究』1993
- 49. 原 洋之介『東南アジア諸国の経済発展
開発主義的政策体系と社会の反応』1994
- 50. 岡本 さえ『清代禁書の研究』1996

4. 東洋文化研究所叢刊 (*印は在庫なし)

- *1. 鎌田 茂雄『華嚴学研究資料集成』1983
- 2. 深井 晋司編『ターク・イ・ブスターン III 実測図集成』1983
- *3. 鎌田 茂雄『禪典籍内華嚴資料集成』1984

4. Nakane Chie ed., *Social Science and Asia*, 1984
- *5. 蜂屋 邦夫編『儀禮士冠疏』1984
- *6. 鎌田 茂雄『道藏内仏教思想資料集成』1986
7. 山田 三郎編『中部タイ稲作農村の経済変容』1986
- *8. 蜂屋 邦夫編『儀禮士昏疏』
- *9. Seki Hiroharu, *The Asia-Pacific in the Global Transformation*, 1987
- *10. 蜂屋 邦夫編『中国道教の現状 道士・道協・道観』1990
- *11. 池田 温編『中国古代寫本識語集録』1990
- *12. Tomosugi Takashi, *Rethinking the Substantive Economy in Southeast Asia*, 1991
- *13. 松丸 道雄編『甲骨文字字釋綜覧』1993
14. 加納 啓良編『中部ジャワ農村の経済変容 チョマル郡の85年』1994
- *15. 平勢 隆郎『新編史記東周年表 中國古代紀年の研究序章』1995
16. 蜂屋 邦夫『中国の道教 その活動と道観の現状』1995
17. 羽田 正『シャルダン『イスファハーン誌』研究 17世紀イスラム圏都市の肖像』1996
18. 平勢 隆郎『中國古代紀年の研究 天文と曆の検討から』1996

5. イラク・イラン遺跡調査団報告

- 『テル・サラサート I』*1958, 『同 II』*1970, 『同 III』1975, 『同 IV』1981
 『マルヴ・ダシュト I』*1962, 『同 II』*1962, 『同 III』1973
 『ファハリアン I』*1963
 『西アジアの人類学的研究 I』*1963, 『同 II』*1968
 『デーラマン I』*1965, 『同 II』*1966, 『同 III』*1968, 『同 IV』1971
 『ターク・イ・ブスターン I』*1969, 『同 II』*1972, 『同 III』1983, 『同 IV』1984
 『ハリメジャン I』1980, 『同 II』1982

6. インド史跡調査団報告

- 『デリー: デリー諸王朝時代の建造物の研究』第 I 巻 遺跡総目録 *1967,
 第 II 巻 墓建築 *1969, 第 III 巻 水利施設 *1970

7. 東アジア部門美術研究分野報告

『中国絵画総合図録』第一巻 アメリカ・カナダ篇 *1982, 第二巻 東南アジア・ヨーロッパ篇 *1982, 第三巻 日本篇 I 博物館 *1983, 第四巻 日本篇 II 寺院・個人 *1983, 第五巻 総索引 *1983

8. 蔵書目録

『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』 *1973

『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録 書名人名索引』 *1975

『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』重版 *1981, *1996

9. その他

『アジアの社会と文化』 創立40周年記念論集 全三巻 *1982

『東洋文化研究所の50年』 創立50周年記念誌 1991

『アジアの文化と社会』 創立50周年記念論集 全三巻 *1992

I 執筆著書・論文等総数 受賞

本研究所の教官が1994・95年度に発表した著書・論文等の点数は次の通りである。

著書 38冊, 論文 124本, その他 151点

本研究所の教官の文化勲章・文化功労賞・学士院賞の各受賞者は次の通りである。

文化勲章	江上 波夫	1991年
文化功労賞	辻 直四郎 (併)	1978年
	江上 波夫	1983年
	山本 達郎 (併)	1986年
	川野 重任	1993年
	中根 千枝	1993年
学士院賞	仁井田 隆	1934年
	宇野 圓空	1942年
	山本 達郎 (併)	1952年
	周藤 吉之	1956年
	福島 正夫	1963年
	鎌田 茂雄	1976年
	荒 松雄	1978年
	池田 温	1983年
	鈴木 敬	1985年
	田仲 一成	1993年

IX 所員の活動

汎アジア部門

原 洋之介 はら ようのすけ

略歴

1944.2 生。1967 東大・農・農経卒，1969 同大大学院農学・農経・修士課程修了，1972 同博士課程退学。1976 農学博士（東大）。1972 年東文研助手，その間 1975 年から 1977 年まで国際連合アジア太平洋経済統合委員会（バンコク）に派遣，1978 国際開発センター研究員（非常勤），東大農学部非常勤講師，1979 東文研助教授，1988 同教授。

研究活動の概要

理論経済学がその機能と構造とをときあかしている市場経済に関して更に地域研究の視点からその理論の拡張をはかると同時に，地域研究が焦点をあてているアジア各地の個性ある社会構造に対応して市場経済の展開に地域性がみられることを比較論的に解明する研究を続けている。

過去の主要業績（1994.3 まで）

- 『クリフォード・ギアツの経済学』リプロポート 1985
- 『東南アジアからの知的冒険』（共著）リプロポート 1986
- 『中部タイ稲作農村の経済変容』（共著）東文研叢刊 1986
- 『アジア経済論の構図』リプロポート 1992
- 『東南アジア諸国の経済発展』東文研報告 1994

過去2年間の研究業績

- 『地域研究と経済学』重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ
No.6 1995
- 『経済自由主義ルールの新たなる構図を求めて，経済社会生態力学の構築にむ

けて』重点領域研究 総合的地域研究報告 1995

『復活する歴史としてのアジア・ダイナミズム』NTT出版 1995

『開発経済論』岩波書店 1995

教育活動

東京大学大学院農学生命科学研究科 (1994・95年度), 東京大学大学院総合文化研究科 (1994・95年度), 東京大学農学部 (1994・95年度), 東京外国語大学外国語学部 (1995年度), 大阪市立大学大学院経済学研究科 (1995年度)

学外活動

アジア政経学会 (理事), 日本農業経済学会, 農林省農業総合研究所専門委員 (1990. 4以降), 大蔵省財政金融研究所特別研究官 (1995. 4以降), 国際開発センター研究顧問 (1985. 4以降)

猪口 孝 いのぐち たかし

略歴

1944. 1生。1966 東大・教養・教養卒, 1968 東大大学院社会学・国際関係論・修士課程修了, 1969 上智大学助手, 1970 マサチューセッツ工大政治学部大学院博士課程入学, 1974 同修了, 哲学博士 (Ph.D.) (マサチューセッツ工大)。同年上智大外国語学部助教授, 1977 東文研助教授, 同年スイス出張, 1978 帰国, 1983 アメリカ出張, 1984 帰国, 1984 文献センター助教授兼務 (1986まで), 1988 東文研教授。1993 国連大学兼任研究員, 1995. 4 国連大学上級副学長。

研究活動の概要

過去 30 年, 東アジアの国際政治の理論と実証を中心にして研究を進めて来た。中でも次の 4 個の主題は主要なものである。(1) 東アジアの国際政治の分野で, 『国際政治の数量分析: 北京・平壤・モスクワ, 1961年~1966年』巖南堂 1970, (2) 日本の国際関係の分野で, 『国際政治経済の構図』有斐閣 1982, (3) 日本政治の分野で, 『日本人の選挙行動』東大出版会 1986, (4) 政治理論の分野で, 『社会科学入門』中央公論社 1985, などを出版した。上記の著作の他にも無数の論文を日本語・英語で書いている。社会科学の引用索引として最も権威のある *Social Science Citation Index* に記録されているように, 数多くのものが国際学術研究書・研究論文の中で頻りに引用されている。

過去の主要業績 (1994. 3 まで)

The Political Economy of Japan, Stanford University Press, Stanford, 1988.

Japan's International Relations, Pinter Publishers, London, 1991.

United States-Japan Relations and International Relations after the Cold War, University of California, San Diego, 1995.

『現代政治学叢書』 東京大学出版会（全20巻予定（既刊18巻）の責任企画編集）1988～

『シリーズ東アジアの国家と社会』 東京大学出版会（全6巻責任企画編集）1992～1993

過去2年間の研究業績

“The Rise and Fall of Reformist Governments: Hosokawa and Hata, 1993-1994,” *Asian Journal of Political Science* 2-2, 1994.

“Japan and Pacific Asia: Reflections on the Fiftieth Anniversary of the End of World War II,” *The Japan Foundation Newsletter* 22-5, 1995.

『世界変動の見方』 筑摩書房 1994

“Dialectics of World Order: A View from Pacific Asia,” in Hans-Henrik Holm and George Sorenxen, eds., *WHOSE WORLD ORDER?—Uneven Globalization and the End of the Cold War*, WestView Press, 1995.

“Japan's United Nations and Other Peace-keeping Operations,” *International Journal* 2, 1995.

“Security and Political Interests Pro- and Anti-Proliferation in Northeast Asia,” in Andre Mack, ed., *Nuclear Policies in Northeast Asia*, UNIDIR.

United States-Japan Relations and International Institutions: After the Cold War, co-editor, Graduate School of International Relations and Pacific Studies, University of California, San Diego, 1995.

“Distant Neighbors? Japan and Asia,” *Current History*, 11 Nov. 1995, Vol. 94 No. 595. 他23点

教育活動

東京大学大学院法学政治学研究科(1995年度)

学外活動

日本政治学会（理事），日本国際政治学会（理事），日本選挙学会（理事），現代日本政治研究会（理事，編集委員），American Political Science Association, International Studies Association, International Political Science Association.

雑誌編集委員：『レヴァィアサン』, *International Studies Quarterly*, *Mershan Review of International Studies*, *Government and Opposition*, *Journal of Conflict Resolution*.

略歴

1954.8 生。1977 東大・教養・教養卒，同年東大大学院社会学・国際関係論・修士課程入学，同年マサチューセッツ工大政治学部大学院博士課程入学，1981 同修了，Ph.D. (政治学) (マサチューセッツ工大)，同年東大大学院修士課程退学。同年平和・安全保障研究所研究員，1983 東大教養学部助手，1984 東大教養学部助教授，1990 東文研助教授。

研究活動の概要

第一の研究活動は，世界システムについての理論的・実証的研究である。世界システムの研究の概念枠組みについての研究，さまざまな世界システムの分類についての研究を開始した。現段階の世界システムをどう把握するかについては『新しい「中世」』の1996年刊行を予定している。第2の研究活動は，国際政治の数量的分析であるが，総理大臣その他の国会における演説データのデータベースを作成するとともに，そのような政治テキストのコンピュータ分析システムの開発に取り組んでいる。第3の研究活動は，東アジア国際政治の現状分析であるが，1996年中に日本の安全保障政策の展開を論じた『安全保障』の刊行を予定している。

過去の主要業績 (1994.3 まで)

「中国の国際紛争行動のマクロ・モデル 1950-1978」『アジア研究』 29-1
1982

『『教科書問題』をめぐる中国の政策決定』岡部達味編『中国外交—政策決定の構造』日本国際問題研究所 1983

『世界システム』東京大学出版会 1989

『日中関係 1945-1990』東京大学出版会 1991

『戦争と国際システム』(山本吉宣と共編著) 東京大学出版会 1992

過去2年間の研究業績

“Two Faces of East Asian Security and Japan’s Policy,” in Geritt Gong, ed., *Korean Peninsula Trends and U.S.-Japan-South Korea Relations*, Washington, D. C.: The Center for Strategic and International Studies, 1994.

“Rhetorics and Limitations of Japan’s New Internationalism,” *Bulletin of the Japanese Studies Association of Australia* 14-1, 1994.

『『覇権・混乱・相互依存』三つのシナリオ』『季刊アステイオン』No.33 (1994年夏) (英文訳は，“Hegemony, Chaos, Interdependence: Three

Scenarios for China," *Japan Echo* 21-3, 1994.

「第2次世界大戦後のアジアと戦争」平野健一郎編 『講座現代アジア4 地域システムと国際関係』東京大学出版会 1994

"The Domestic Context: Japanese Politics and U. N. Peacekeeping," in Selig S. Harrison and Masashi Nishihara, eds., *UN Peacekeeping: Japanese and American Perspectives*, Washington, DC: Carnegie Endowment for International Peace, 1995. (日本語訳は、「国連平和活動と日本」西原正, セリグ・S・ハリソン編『国連PKOと日米安保—新しい日米協力のあり方』亜紀書房 1995)

"UN Peace Operations and Japan-US Relations," Peter Gourevitch, Takashi Inoguchi and Courtney Purrington, eds., *United States-Japan Relations and International Institutions: After the Cold War*, The Graduate School of International Relations and Pacific Studies, University of California, San Diego, 1995.

"The Asia-Pacific Region and Russia," in Robert D. Blackwill, Rodric Braithwaite and Akihiko Tanaka, *Engaging Russia*, New York, Paris, and Tokyo: The Trilateral Commission, 1995.

「マクロ歴史理論の可能性」衛藤藩吉先生古希記念論文集編集委員会編『20世紀アジアの国際関係 IV 国際システムの理論と実態』原書房 1995.

教育活動

東京大学大学院法学政治学研究科 (1994・95年度), 東京大学大学院総合文化研究科 (1994・95年度), 東京大学教養学部教養学科 (1994・95年度)

学外活動

日本国際政治学会 (対外交流委員), アジア政経学会, 国際法学会, 日本政治学会 (年報編集委員), 日中関係史学会 (理事), International Studies Association, 通商産業省産業構造審議会臨時委員 (1995.10~1996.10), 国際連合大学高等研究所兼任教授 (1996.2~1996.12)

原田 至郎 はらだ しろう (1996.4採用)

略歴

1967.10生。1990東大・教養・教養卒, 同年東大大学院総合文化・国際関係論・修士課程入学, 1992同修了, 同年同博士課程進学, 1994日本学術振興会特別研究員, 1996同採用期間満了, 同年東大大学院博士課程退学。同年東文研助手。

研究活動の概要

私の研究活動の主たる関心は、研究対象としての戦争と、研究手法としての数量分析にある。当初は、近代世界システムにおける国家間戦争の数量データ・セットを整備し、これに統計処理を施すことで、それらが全体として示す姿を見出し、また力の分布構造と世界経済の局面というシステム・レベルの要因と戦争の頻度・大きさとの関係を明らかにした。現在は、対象としての戦争については、その終結態様に影響する様々な要因を明らかにするべく、東洋で多発した戦後の武力紛争のケース・スタディとデータ蓄積・分析を進めている。また、手法としての数量分析の面では、演説など政治テキストの内容分析システム構築の共同研究を行っている。

過去の主要業績

「近代世界システムにおける戦争とその統計的記述 1495年から1989年まで」

「世界システムレベルの戦争相関因子 力の分布構造と世界経済の状態」山本吉宣・田中明彦編『戦争と国際システム』東京大学出版会 1992

「世界システムレベルの戦争相関因子」『相関社会科学』2・3 1992

学外活動

日本国際政治学会、国際法学会、日本政治学会

松井 健 まついたけし

略歴

1949.6 生。1972 京大・理卒、1974 京大大学院理・動物・修士課程修了、1976 京大大学院理・動物・博士課程退学。1980 理学博士（京大）。1976 京大人文学部研究所助手、1983 神戸学院大教養部助教授、1990 神戸学院大人文学部助教授、1991 同教授、1992 東文研助教授、1994 同教授。

研究活動の概要

異文化を理解し記述するための理論上の諸問題を、主として認識人類学とその具体的な方法の批判的検討から明らかにしようと試みてきた。物理的・生物的・自然が、どのように概念化され命名分類されるかを解析することを通して、そのなかに生活する人びとの自然認識を把握しようという問題設定から、民俗分類やエスノ・サイエンスを実際に援用して、その特長と問題点を指摘してきた。同時に、認識人類学が方法上の要請から語彙を中心的な研究上の手がかりとしてきたのに対して、むしろディスコースを重視することによって、その営為を自然から社会的な事象にまで拡大する手順を考案した。文化記述の方法、主題、その歴史的

背景については、人類学や地理学の既存の理論枠よりも広い展望のもとに批判的検討を行っていくことを課題としたい。

理論的方法論的研究とならんで、西南アジア地域の乾燥地帯の記述研究にも重点をおいてきた。1978年のアフガニスタンの遊牧民調査以来、1985、87、89、94、95年にわたって、パキスタン（バルーチスタン）とインド西部（ラージャスターン）の砂漠地帯の生活について、民族誌的研究をおこなってきた。そのなかで遊牧という生活様式の特徴を西南アジアの社会状況のなかで画定し、定着民社会をも視野にいれつつ英国植民地時代前後の生業経済構造と地域政治史のかかわりを考察してきた。ここから、西南アジアの砂漠文化と呼ぶことができるような特質を抽出して、それを記載するための基本的なパラダイムを探ることを課題としている。

過去の主要業績（1994.3まで）

『バシュトゥン遊牧民の牧畜生活—北東アフガニスタンにおけるドゥラニ系バシュトゥン族調査報告』京都大学人文科学研究所 1980

『自然認識の人類学』どうぶつ社 1983

『琉球のニュー・エスノグラフィー』人文書院 1989

『セミ・ドメスティケーション—農耕と遊牧の起源再考』海鳴社 1989

『認識人類学論攷』昭和堂出版 1991

過去2年間の研究業績

「インド北西辺境の〈サガ〉」『月刊百科』384 1994

「コスモロジーの類型論—民俗分類の視点から」『東文研紀要』125 1994

「民藝の現代的課題（一）～（三）」『民藝』504～506 1994～1995

「分泌 = 排泄物の文化地理学—オードリクール再検」『国立歴史民俗博物館研究報告』61 1995

「イスラームと自然環境」竹下政孝（編著）『講座イスラーム世界4 イスラームの思考回路』悠思社 1995

「解題文化としての民藝」式場隆三郎（編著）『琉球の文化（復刻版）』格樹社 1995

「インダス河流域の部族社会における婚外性関係の『偽造』」『UP』275 1995

「イスラーム文化の蔭のナツメヤシの酒」山本紀夫・吉田集而（編著）『酒づくりの民族誌』八坂書房 1995

他3点

教育活動

東京大学大学院理学研究科（1994・95年度）、東京大学大学院総合文化研究科

(1994・95年度)

学外活動

日本民族学会 (『ニュースレター文化人類学』編集委員), 日本文学地理学会, 国立民族学博物館研究協力者・共同研究員, 沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員, 国立歴史民俗博物館共同研究員

末成 道男 すえなり みちお

略歴

1938.3生。1962 東大・教養・教養卒, 1964 東大大学院生物・人類学・修士課程修了, 1970 東大大学院社会学・文化人類学・博士課程退学, 同年学術振興会奨励研究員 (1972 まで)。1971 社会学博士 (東大)。1972 聖心女子大文学部専任講師, 1975 同助教授, 1983 同教授, 1990 東文研教授。1987 北京外国語学院日本学研究中心客員教授, 1989 ビッツバーグ大学客員教授。

研究活動の概要

東アジア社会の, 家族, 親族, 村落, 年齢組織, 宗教を主要テーマとし比較研究してきた。日本では, 主に同族, 年齢原理などのテーマで発表した。台湾原住民については, 1966 年以来パイワン族, ブュマ族, アミ族, サイシャット族についての人類学的調査を行ってきた。台湾漢族については, 1976 年中部福建集落, 1985 年からは北部客家農村の調査を行っている。韓国では, 東部漁村で 1979 年より 1 年間住み込み調査した。中国大陸では客家の原郷である広東省梅県の調査を行った。ベトナムでは, 1992 年より 8 回にわたり調査を行ってきたが, それぞれ中, 韓, 日と部分的に共通性を有しており, きわめて興味深い。こうした調査をふまえ, 今後その変容過程を追う予定である。

過去の主要業績 (1994.3 まで)

『台湾アミ族の社会組織と変化』東京大学出版会 1982

『仲間』(共著) 弘文堂 1984

過去 2 年間の研究業績

『鶴ヶ島町史』[民俗社会編] (編著) 鶴ヶ島市 1994

『中国文化人類学文献解題』(編) 東京大学出版会 1995

Perspectives on Chinese Society: View from Japan (Eds. with J.S. Eades & C. Daniels), 1995

『東洋文化 特集: 東アジアにおける人類学と歴史研究』76 (編著) 1996

「ベトナムの家譜」『東文研紀要』127 1995

「葬儀と埋葬」『アジア読本 中国』河出書房新社 1995

「人類学と歴史」『東洋文化 特集：東アジアにおける人類学と歴史研究』76
1996

「ベトナムの甲についての覚え書き」末成道男編『人類学から見たベトナム社会の基礎的研究』科学研究費報告書 1996

教育活動

東京大学教養学部教養学科（1994・95年度）、東京大学大学院総合文化研究科（1994・95年度）

学外活動

日本民族学会（理事，編集担当），日本学術会議東洋学研究連絡委員，東京外国語大学 AA 研共同研究員（1994・95年度），国立民族学博物館共同研究員（1994・95年度）

関本 照夫 せきもと てるお

略歴

1947.1 生。1972 東大・教養・教養卒，1974 東大大学院社会学・文化人類学・修士課程修了，社会学修士。1976 国立民族学博物館助手，1981 一橋大社会学部専任講師，1983 同助教授，1986 東文研助教授併任，1987 東文研助教授，1991 同教授。

研究活動の概要

専門は文化人類学・東南アジア地域研究。主な研究地域はインドネシア，マレーシア。東南アジアの近現代における文化の動態，文化の政治的脈絡を研究。これまでの主要研究テーマは，(1)インドネシア新体制下における中部ジャワ農村の政治経済を，権威の構造，ヒエラルキー秩序，文化をめぐる政治に重点をおいて研究。(2)前植民地期東南アジアの王権と，その近現代における変容。(3)マレーシアとスリナムのジャワ人移民社会の研究。現在は，ジャワ・パティック産業の社会史・民族誌調査を通じ，近代国民国家形成過程での伝統の生成，国民文化・都市大衆文化との相互作用について研究中。

過去の主要業績（1994.3 まで）

「サウイト事件の文化論的考察」鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究』東京大学出版会 1982

「東南アジア的王権の構造」伊藤・関本・船曳編『現代の社会人類学』第3巻
東京大学出版会 1987

「二者関係ネットワーク論再考—東南アジアの事例」『中国—社会と文化』6
1991

「ジャワ人のヒエラルキーと自由—村人の集いの二つの形」『東文研紀要』116
1992

過去2年間の研究業績

『国民文化が生れる時—アジア・太平洋の現代とその伝統』（共編著）リプロ
ポート 1994

「スリナムのジャワ人」『文明の地域性』（重点領域研究「総合的地域研究」成
果報告書シリーズ：No.3）1994

“Pioneer Settlers and State Control: A Javanese Migrant Community in
Selangor, Malaysia,” 『東南アジア研究』32-2, 1994.

「社会」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいインドネシア 第2版』弘文
堂 1995

「インドネシアのドラえもんと＜民族文化＞」『民博通信』68 1995

「日本の人類学と日本史学」『講座日本通史別巻1 歴史意識の現在』岩波書店
1995

「インドネシア近代のバティック産業の事例—文化の自画像の生成」『総合的
地域研究』10 1995

“Uniforms and Concrete Walls: Dressing the Village under the New Or-
der,” in Henk Schulte Nordholt, ed., *Outward Appearances: Dressing State
and Society in Indonesia*, KITLV. (近刊)

他6点

教育活動

東京大学大学院総合文化研究科（1994・95年度）、東京大学教養学部（1994・
95年度）、筑波大学大学院地域研究科（1994年度）

学外活動

日本民族学会（理事）、東南アジア史学会、Association for Asian Studies,
Japan-Southeast Asia Forum (Chair), Social Science Research Council, New
York (Committee Member), 国立民族学博物館共同研究員

略歴

1941.3 生。1964 東大・教養学部卒，1966 東大大学院人文・比較文化・修士，1969 パリ大学人文学部博士 (Docteur de l'université de Paris)。1969 東大教養学部助手，1971 東文研助手，1977 千葉大教養部助教授，1990 東洋学文献センター教授，東文研教授兼務，1991 東洋学文献センター主任兼務。

研究活動の概要

中国の前近代（日本の江戸時代にあたる時代）におけるものの見方，考え方を，比較思想の視点から探り，1) 清代禁書 2) 中西文化交流 に焦点を絞って研究を進めている。1) 近代の夜明けにあたる一八世紀後半に中国では厳しい「文字獄」と「禁書」が行われた。禁書のモチーフ，著者の思考，清朝の意図，東アジアや中国の社会に与えた影響を，『清代禁書の研究』として出版。2) 中国とヨーロッパの文化接触が両文化圏の比較思想にいかなる足跡を残したかを，論文「中華における比較文化的意識の特徴」等に発表した。東洋学文献センターにおける研究活動としては，学内外の協力を得て「現代中国書データベース」を作成。96 年中に電字本刊行予定。

過去の主要業績（1994.3 まで）

- 「中国人の比較思想—《口鐸日抄》の対話から」『東文研紀要』117 1992
「徐光啓と夷狄」『異文化を生きた人たち』中央公論社 1993
「中国とヨーロッパ」『地域システム』東京大学出版会 1993
「中国比較文化的特色」『中国典籍與文化』江蘇古籍出版社 1993
「乾隆禁書（一）（二）—著者たちのプロフィール」『東文研紀要』115・124 1991・1994

過去 2 年間の研究業績

- 『清代禁書の研究』東文研紀要別冊 1996
「中華における比較文化的意識の特徴」『東洋文化』75 1995
“The Kouduo Richao: A Dialogue in Fujian between China and Europe (1630-1640),” in K. Hashimoto, ed., *East Asian Science: Tradition and Beyond*, Kansai University Press, 1995.
「東洋学の伝統から社会科学のパラダイムへ—フランスにおける近現代中国研究の変遷」（翻訳）『中国—社会と文化』10 1995

教育活動

東京大学大学院総合文化研究科（1994・95 年度），東京大学大学院人文社会系

研究科（1994・95年度）、横浜市立大学大学院国際文化研究科（1994・95年度）

学外活動

日仏東洋学会（監事）、中国社会文化学会（評議員）、R. B. S.（中国研究文献紹介仏誌）寄稿会員、前田奨学基金運営委員

東アジア部門（第一）

濱下 武志 はました たけし

略歴

1943. 11 生。1972 東大・文・東洋史卒、1974 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了、同年同博士課程入学、1977 東洋文庫奨励研究員（1979 まで）、1976 東大大学院博士課程退学。同年香港大センター・オブ・エイジアン・スタディーズにパートタイム・リサーチ・アシスタント（1979 まで）、1979 一橋大経済学部専任講師、1981 同助教授、1982 東文研助教授、1988 同教授。1996 東文研所長及び東大評議員並びに東洋学文献センター長。

研究活動の概要

東南アジア華人と中国華南との歴史的な結びつきを、香港に焦点を当てて研究・調査を行っている。その内容は、華僑送金のメカニズムと、華南・東南アジア間の商業ネットワークを明らかにすることである。香港においては、貿易・貿易金融の検討に加え 19 世紀後半の土地改革、商業組織、外国銀行、地域組織などを調査している。1997 年の返還後も見通す研究を行いたいと考えている。

過去の主要業績（1994. 3 まで）

「近代中国における貿易金融の一考察」『東洋学報』78-3・4 1978

『中国近代経済史関係解説つき文献目録』1980

「世界資本主義とアジア民族資本」『社会経済史学の課題と展望』社会経済史学会 1984

『中国近代経済史研究—清末海関財政と開国場市場圏』東文研研究報告 1989

『近代中国の国際的契機』東京大学出版会 1990

『アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』（共編著）リポート 1991

過去 2 年間の研究業績

「朝貢と条約」溝口雄三他編『アジアから考える』3 東京大学出版会 1994

「近代東アジア国際体系」平野健一郎編『講座現代アジア』4 東京大学出版会
1994

「海のアジア史」『大航海』2 1995

「海と国家」『へるめす』55 1995

「経済発展と多軸化する中国」『世界』3月号 1996

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科（1994・95年度）

学外活動

社会経済史学会（理事・編集委員）、アジア政経学会（理事）、沖縄県教育委員会『歴代宝案』編集委員

黨 武彦 とう たけひこ（1996.3退職）

略歴

1963.9生。1986 九大・文・史学卒，1988 九大大学院文学研究科・史学・修士課程修了，1992 同博士課程退学。1996 文学博士（九大）。1992 東洋学文献センター助手，東文研助手兼務，1996 専修大学法学部専任講師。

研究活動の概要

中国明清史を専攻。18世紀中国の文明史的位置づけ，前近代中国経済の特質の解明を目標に，清代の銅銭を中心とした通貨政策史から研究を出発させた。現在は，貨幣の使用慣行に端的に見られる中国における地域差の問題，その地域差の中での中国北部地域の位置を後期中華帝国における南北問題を軸に分析することを一つの課題とする。また，上記課題の分析に不可欠な档案史料と呼ばれる一連の史料群それ自体の具体的検討を通して，情報処理システムとしての中華帝国の文書行政とその権力構造との関わりや，中国本部のみならず東アジア世界に広がる壮大な文書行政システムの構造を明らかにすることをもう一つの重要な課題としている。

過去の主要業績（1994.3まで）

「乾隆初期の通貨政策—直隸省を中心として」『九大・東洋史論集』18 1990

「清中期直隸省における地域経済と行政—永定河治水を中心として」川勝守篇

『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究』中国書店 1993

過去2年間の研究業績

「明清期畿輔水利論の位相」『東文研紀要』125 1994

「乾隆九年京師錢法八条の成立過程およびその結末—乾隆初年における政策決定過程の一側面」『九大・東洋史論集』23 1995

「清代における地域行政—乾隆期直隸省における通貨政策、水利・治水政策を中心として」(九大大学院博士論文) 1996

学外活動

史学会, 東洋史研究会, 九州華僑華人学会, 国立民族学博物館共同研究員
(1994・95年度)

青木 敦 あおき あつし (1996.4 配置換)

略歴

1964.4 生。1988 東大・文・東洋史卒, 1991 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了, 同年同博士課程入学, 1992 中国人民大学留学, 1993 帰国, 1994 東大大学院博士課程退学。同年東文研助手, 1996 岡山大学文学部専任講師。

研究活動の概要

現在研究を進めている主要な研究テーマは制度と経済の長期変動, 具体的には10~13世紀中国の制度運営の地域差と変化である。ことに, 地方勢力との関係が密である州・県の知事の人事がどの機関に握られているかを『宋会要』中の罷免事例の計量的分析を通じて検討し, 人口・社会構造との関連を研究している。この史料の信頼性の書誌学的評価にかんしては, 「『宋会要』職官 64-75「黜降官」について」『史学雑誌』102-7に発表してある。また, この時期の中国の制度を長期的展望の中に位置づけるべく, 制度の経済学の視点から, 人口と行政, 人口土地比率と税制の関係などについても概括的検討を行っている。

過去の主要業績 (1994.3 まで)

発表要旨「金末に於ける地方行政制度の変遷—行省・行六部・元帥府を中心として見た」『史学雑誌』97-12 1988

報告要旨「金末行尚書省(行省)制度の沿革—特に金末河北社会との関わりを中心に」『歴史学研究月報』347 1988

「南宋の羨余と地方財政」『東洋学報』73-3・4 1992

「『宋会要』職官 64-75「黜降官」について—宋代官僚制研究のための予備的考察」『史学雑誌』102-7 1993

『世界史を読む事典』朝日新聞社 1994 (10~14世紀東アジア人名項目)

過去2年間の研究業績

「回顧と展望 五代・宋・元」『史学雑誌』103-5 1994

「1993年日本五代宋元史研究状況」(趙喜英訳)『宋史研究通訊』95.1期 1995

「ポスト・ワルラスからのアプローチ—要素賦存・労働力配分・時代区分論」
『宋代の規範と習俗』汲古書院 1995

「書評 丹羽友三郎『中国元代の監察官制』」『法制史研究』47 1996

学外活動

宋代史研究会(1995年度幹事), 宋代史研究会研究報告第5集編集委員, 歴史学研究会(委員, 1995.9~), アジア農村調査会(研究班長), 社会経済史学会, 史学会, 東洋史学会

宮嶋 博史 みやじま ひろし

略歴

1948.10生。1972京大・文・史学卒, 1974京大大学院・東洋史・修士課程修了, 1977同博士課程退学。同年京大文学部研修員(1979まで), 1979東海大学文学部専任講師, 1981都立大人文学部助教授, 1983東文研助教授, 1992同教授。

研究活動の概要

朝鮮の李朝期から植民地期にかけての, 農村経済を中心とした社会経済史的研究を主たる研究テーマとしている。朝鮮社会の長期的な変動趨勢を規定する最大の要因であったと思われる農村経済の変動を, これまでは農業技術・農業経営の発展の問題と, 農村社会構造の変動の問題という, 2つの側面から追求してきた。1991年にはこれまでの研究の集大成として、『朝鮮土地調査事業史の研究』(東文研報告)を刊行した。

現在は, 李朝期から植民地期にかけての土地所有状況の変化を明らかにすべく, 量案・戸籍台帳・徴税文書・土地台帳等の各種帳簿資料の研究をすすめている。

過去の主要業績(1994.3まで)

「朝鮮甲午改革以後の商業的農業」『史林』57-6 1974

「朝鮮農業史上における15世紀」『朝鮮史叢』3 1981

「朝鮮社会と儒教」『思想』750 1986

『朝鮮土地調査事業史の研究』東文研報告 1991

『近代朝鮮水利組合の研究』(共著)日本評論社 1992

過去2年間の研究業績

「朝鮮両班社会の形成」『アジアから考える4 社会と国家』東京大学出版会

1994

「東アジアにおける近代的土地変革」中村哲編『東アジア資本主義の形成』青木書店 1994

「東アジアの経済社会」『アジアから考える6 長期社会変動』東京大学出版会 1994

「東アジア小農社会の形成」同上所収

『両班（ヤンバン）』中公新書 1995

「朝鮮におけるアジア認識の不在」『国際交流』71 1996

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科（1994・95年度）、九州大学文学部（1994・95年度）、熊本大学文学部（1995年度）、東洋大学大学院文学研究科（1995年度）

学外活動

朝鮮史研究会、韓国経済史学会、大蔵省金融財政研究所「21世紀の世界とアジア」研究会委員

川村 康 かむむら やすし（1995.3退職）

略歴

1961.10生。1984早大・法卒、1986早大大学院法学・基礎法学・修士課程修了、同年同・公法学・博士後期課程入学。1987早大法学部助手、1990同退職、同大学院博士後期課程退学、同年東文研助手、1995同退職、同年早大大学院博士後期課程5年次再入学、1996同退学、同年関西学院大学法学部専任講師。

研究活動の概要

唐宋を中心とする中国法制史を専攻している。家族法、刑法・刑罰法などを主たる研究領域とし、『唐律疏議』雜律篇の訳註や宋代の法典編纂の概観なども行っている。これらの研究を通じて、当時の中国社会における現実の法現象と法規定との間の乖離と、それを解決するためのさまざまな試みの実相が垣間見られた。それは刑法・刑罰法の領域において顕著であったが、その分析の結果、法と現実の衝突を解消する任務を担わされた官僚と、その権限の最終的保有者たる皇帝の役割も浮かび上がりつつある。中国の皇帝権力については従来政治史的な観点から論じられてきたが、法制史からもある程度の解明が可能なのである。

過去の主要研究業績（1994.3まで）

「宋代における養子法——判語を主たる史料として」『早稲田法学』64-1, 2

「宋代折杖法初考」『早稲田法学』65-4 1990

「唐五代杖殺考」『東文研紀要』117 1992

「宋代杖殺考」『東文研紀要』120 1993

「宋代死刑奏裁考」『東文研紀要』124 1994

過去2年間の研究業績

「宋代の仇討」『東方』163 1994

「1994年学界回顧—東洋法制史」『法律時報』66-13 1994

「宋代断例考」『東文研紀要』126 1995

「「闕殺遇恩情理輕重格」考」『東洋史研究』53-4 1995

学外活動

史学会、中国社会文化学会、東方学会、東洋史研究会、比較法史学会、法制史学会（『法制史文献目録』編集委員・『法制史研究』編集委員）

松丸 道雄 まつまる みちお（1995.3 停年退職）

略歴

1934.8 生。1958 東大・文・東洋史卒，1960 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了。同年 東文研助手，1966 同退官，同年オーストラリア国立大研究員（高等研究所極東史料），1970 同退職，同年東文研専任講師，1971 同助教授，1977 東洋学文献センター助教授兼務（1980 まで），1980 東文研教授，1986 東洋学文献センター主任（教授）兼務（1987 まで），1995 停年退職，同年東大名誉教授。

研究活動の概要

中国史研究のひとつの結節点である秦漢時代を遡って、文字資料によって追求可能の上限である殷周時代からはじめ、春秋戦国期を通して秦漢に至るまでの歴史の過程を体系的に把握したいというのが、そもそもの研究の出発点であった。

甲骨文・金文という二大出土文字資料は、共に考古遺物でもあるため、研究は勢い文献学的であると共に考古学的であるという二面性をもつことになる。

甲骨文の地名を検討する中から、殷王の日常的行動範囲を考察し、その直轄区域は極めて限定されたもので、この国家は決して“古代殷帝国”といった表現によってイメージされるような規模と構造をもったものではなかったろう、と考えた（「殷墟卜辞中の田獵地について」）。これを基礎として、殷周両期を通しての新たな史的把握を目指して「殷周国家の構造」を書いた。

西周期を体系的に把握することの困難を克服すべく、研究の中心を甲骨文から金文に移し、基礎資料を根本的に検討しなおすこととした。世界的に話題になっていた金文史料の偽作問題の検討を経て、金文資料を外形的のみならず、内面的史料批判の対象としなくてはなるまい、との反省が生じ、そこから、「西周青銅器製作の背景」等の、新たな史料批判方法論の確立を目指した論文を書くことになった。

その延長上の一方向として考えられるようになったのが、古代青銅器製作技術の解明である。こういった研究の基礎には、地道な機会を把えての史料蒐集・蓄積が不可欠である。甲骨文・金文・青銅器の拓本・写真等の蒐集が並行的に進められ、図録・目録等として継続して整理・刊行しつつある。

過去の主要業績（1994.3まで）

「殷墟卜辞中の田獵地について—般代国家構造研究のために」『東文研紀要』

31 1963

「殷周国家の構造」『岩波講座 世界歴史』4 1970

「西周青銅器製作の背景—周金文研究・序章」『東文研紀要』72 1977

『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』東文研報告 1983

「西周後期社会にみえる変革の萌芽—罍銘解釋問題の初歩的解決」『西嶋定生博士還暦記念 東アジア史における国家と農民』山川出版社 1984

『甲骨文字字釋綜覧』（高嶋謙一氏と共編）東文研叢刊 1993

1994.4～95.3の研究業績

「秦漢時代の瓦当文字」『東京大学東洋文化研究所蔵・中国秦漢瓦当展』図録所収、古河市立篆刻美術館 1994.4

<再録>『書道界』1994年5月號 1994.5

<再録>『書道美術新聞』第477號 1994.5.21

<再録>『書道藝術』1994年7月號 1994.7

「殷武丁期牛肩胛骨／後漢建和二年上郡銀挺」青柳正規・西野嘉章編『東アジアの形態世界』I 東京大学出版会 1994

許青松「書藝術の幼年時代—館蔵殷墟甲骨文字をめぐる諸問題」（翻訳）『中国歴史博物館蔵法書大観』京都・柳原書店 1994

馬旭「殷代金文序説」（翻訳）同上

「中国古代の毛筆—「シルクロードのまもり」展を見て」『新美術新聞』第726號 1995年2月21日刊

<再録>『書作』第292號 1995.4

「漢字研究に制度的支援を」（講演記録）『書道美術新聞』第507號 1995.3.21

「松丸道雄教授略歴・主要著作目録」『東文研紀要』127 1995

教育活動

東京大学大学院人文科学研究科（1994年度）

学外活動

日本甲骨学会（代表者）、史学会（評議員）、東方学会（評議員）、東大中国学会（評議員）、書学書道史学会（常任理事）、その他参加学会は多数につき省略。
鄭州大学殷商文化研究所（名誉研究員）

平勢 隆郎 ひらせ たかお

略歴

1954.8生。1979 東大・文・東洋史卒、1981 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了。1981 鳥取大学教育学部助手、1984 同専任講師、1987 同助教授、1990 九州大学文学部助教授、1992 東文研助教授。

研究活動の概要

中国史上の大変革期である春秋戦国時代の歴史的性格は何かを一貫して追求してきている。春秋およびその前代を語る史料は、ほぼ戦国時代に成書されたもので、その時代の社会的影響を強く受けている。この点で、史料批判が他の時代に比較してより特殊な位置づけをもち、考古史料の活用が不可欠となる。『史記』春秋戦国時代部分には、三割を越す年代矛盾があり、構造的に誤っている。この誤りをただすため、八つの基準を導いて再整理し、矛盾を解消して『新編 史記東周年表』としてまとめた。その結果を利用しつつ、考古史料を含む天文と暦の史料を駆使し、殷末から漢代武帝にいたるまでの紀年問題を論じて『中国古代紀年の研究』にまとめた。

過去の主要業績（1994.3まで）

「楚王と県君」『史学雑誌』90-2 1981

『春秋晋国侯馬盟書字体通覧—山西省出土文字資料』東京大学東洋文化研究所
文献センター叢刊別集15 1988

「『侯馬盟書』 “𠄎”・“𠄎” の字積とその関連問題— “趙「稷」・「范」氏”
なる字積による時期決定の検討を基礎として」『史淵』128 1991

過去2年間の研究業績

『新編 史記東周年表—中國古代紀年の研究序章』（東洋文化研究所叢刊15輯、
東京大学東洋文化研究所）東京大学出版会 1995

『中國古代紀年の研究—天文と歴の検討から』(東洋文化研究所叢刊 18 輯, 東京大学東洋文化研究所) 汲古書院 1996

「度量衡の統一とは何か—暦法・称元法との関わりを手がかりに」樋口隆康監修・世田谷美術館・日本放送協会・NHK プロモーション編『秦の始皇帝とその時代展図録』日本放送協会・NHK プロモーション 1994

「古銭(中国)」青柳正規・西野嘉章編『東アジアの形態世界』東京大学総合研究資料館, 東京大学出版会 1994

「西周紀年に関する試論」『中国史学』4 1994

「中国古代の暦における水と火」古代オリエント博物館編『江上波夫先生米寿記念論集 文明学原論』山川出版社 1995

「春秋戦国時代楚国領域の拡大について」『日中文化研究』7 1995

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科(1994・95年度), お茶の水女子大学文教育学部(1995年度)

学外活動

史学会, 日本甲骨学会, 東洋学会, 社会文化学会, 九州史学会, 東洋史研究会, 東方学会, 日本中国考古学会, 島根考古学会, 歴史学研究会, 書学書道史学会

吉開 将人 よしかい まさと (1995.4 採用)

略歴

1967.7 生。1990 東大・文・考古学卒, 1993 東大大学院人文・考古学・修士課程修了, 同年同博士課程進学, 同年中国北京大学留学, 1994 帰国, 1995 東大大学院博士課程退学。同年東文研助手, 1996 香港大学 CAS 派遣。

研究活動の概要

「中国古代文明の形成過程」を, おもに手工業生産と流通に関わる社会経済史的な側面から解き明かすことを目指し, 考古学と金石学の手法によりながら出土資料の分析・研究を進めている。時代的な中心は統一帝国の成立期にあたる戦国・秦・漢時代にあり, そこで主体的役割を果たした中国内地の諸問題を探究する一方, 同時代の中国南疆やベトナム北部などの諸地域にも関心を寄せ, 周辺世界との関わりの中なかで文明形成の道程をあとづけようとしている。最近はまだ「中国社会と考古学」という関心から, 現在の中国考古学の成り立ちを文化史的にあとづけることを目指し, 埋もれた「民国時代の考古学」を掘り起こす作業にも着手

している。

過去の主要業績（1994.3まで）

「曾侯乙墓出土戈・戟の研究——戦国前期の武器生産をめぐる一試論」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』12 1994

「論 T 字玉環」『南中國及鄰近地區古文化研究』香港中文大学出版社 1994

過去2年間の研究業績

「副葬品が語るもの——東アジア世界の中の南越文化」『中国・南越王の至宝』毎日新聞社 1996

「南越考古学と日本」前掲書 1996

「先秦期における単字模鑄造法について——曾侯乙墓出土青銅器群を中心に」『東文研紀要』129 1996

『ライトコロ右岸遺跡』（共著）東大大学院人文科学研究科・文学部 1995

「ドンソン系銅盃の研究」『考古学雑誌』80-3 1995

教育活動

東京大学総合研究資料館研究分担者（1995年度）

学外活動

日本中国考古学会（幹事），東南アジア考古学会（幹事），日本考古学会，考古学研究会，史学会，日本秦漢史研究会

東アジア部門（第二）

蜂屋 邦夫 はちやくにお

略歴

1938.11 生。1963 東大・教養・教養卒，1965 東大大学院人文・比較文化・修士課程修了，1968 同博士課程満期退学。1993 文学博士（東京大学）。1968 東文研助手，1974 同助教授，1987 同教授。

研究活動の概要

中国宗教思想史の研究を行なっている。まず東晋における仏教受容の問題を検討し，孫綽，戴逵らの思想を分析した。一方，班研究として1979年以來『儀禮疏』の講読会を行ない，その成果を『儀禮士冠疏』（1984年），『儀禮士昏疏』（1986年）の両書にまとめた。また，1985年以來，中国との学術交流を断続的に

行ない、同時に大陸道教の道観調査に着手した。1987年以降の数年間、「中国道教の現状調査」を主題として海外学術調査を実施し、その成果を『中国道教の現状』（1990年）、『中国の道教』（1995年）として刊行した。並行して初期全真教の歴史と教理について研究し、『金代道教の研究—王重陽と馬丹陽』（1992年）を出版した。

過去の主要業績（1994.3まで）

編『儀禮士冠疏』東文研叢刊 1984

編『儀禮士昏疏』東文研叢刊 1986

編『中国道教の現状—道士・道協・道観』本文冊・図版冊 東文研叢刊
1990

『金代道教の研究—王重陽と馬丹陽』東文研紀要別冊 1992

過去2年間の研究業績

「道教と東アジア社会」クロニック『世界全史』講談社 1994

『中国の道教—その活動と道観の現状』本文冊・図版冊 東文研叢刊 1995

「東アジア的思惟と仏教—民衆の信仰に見る」東アジア仏教第1巻『東アジア
仏教とは何か』春秋社 1995年

「古代中国の五行思想と水信仰（特別対談）」『河川レビュー』92 新公論社
1995

「道教の現地調査をめぐる諸問題」『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』汲古書
院 1996

他に著書1点、論文1点、その他8点

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科（1994・95年度）、埼玉大学教養学部（1994
年度）

学外活動

日本中国学会、日本道教学会（評議員、1996.2～98.2）、中国社会文化学会、
中国社会科学出版社『中華道教大辞典』編集顧問（1993.7～95.10）

丘山 新 おかやま はじめ

略歴

1948.6生。1972京大・理・物理学卒、1976東大大学院人文・印哲・修士課程
修了、1979同博士課程退学。同年財団法人東方研究会専任研究員、1980中国北

京大学留学（～1982）、1986 日大文理学部専任講師、1990 東文研助教授、1994 同教授。1992.3 ミュンヘン大学客員研究員（～1993.2）。

研究活動の概要

中国のみならず、朝鮮・日本の文化形成に大きな役割を果たしてきた漢訳仏典を資料に東アジアの宗教思想・文化の解明をめざす。(1)漢訳仏典には古典中国語には見られない語彙・語法がある。それらを体系的に整理・研究すること。(2)中国仏教を教理学・教理史としてではなく、中国宗教思想史のなかに位置づけること。そのために、各時代の中国人がどのような問題意識に基づいて漢訳仏典を受容し、さらにインド仏教とは異質で独自の宗教思想を形成していったかを解明すること。また以上の課題とは別に、仏教信仰の根本構造を解明し、仏教思想に基づく宗教哲学の理論構築をめざしつつある。

過去の主要業績（1994.3 まで）

「東晋期仏教における言語と真理」『東洋文化』66 1986

「漢訳仏典論」『東アジアの仏教』岩波書店 1988

「『大阿弥陀経』の思想史的意義」『東洋文化』70 1990

「閉じられた自己」から「開かれゆく自己」へ——仏教における自己と他者」
『東文研紀要』117 1992

『定本中国仏教史Ⅰ』（翻訳）柏書房 1992

過去2年間の研究業績

「超越：他者を見捨てて何処へ？」『超越と神秘 中国・インド・イスラムの思想世界』大明堂 1994

『定本中国仏教史Ⅱ』『同Ⅲ』（翻訳）柏書房 1994

『現代語訳阿含経典』（翻訳）平河出版 1994

「四分律」『大法輪』5 1995

「十誦律・説一切有部律」『大法輪』6 1995

「漢訳仏典と漢字文化圏」『東アジア社会と仏教文化』春秋社 1996

教育活動

東京大学人文社会系研究科（1994・95年度）、名古屋大学文学部（1995年度）

学外活動

中国社会文化学会（評議員）、東方学会（論文目録編集委員）、日本印度学仏教学会、東西宗教交流学会、日仏東洋学会、国立民族学博物館共同研究員（1995.4～1996.3）

鈴木 隆泰 すずき たかやす

略歴

1964.7 生。1989 東大・工・精密機械工学卒，1992 東大・文・印哲卒，1995 東大大学院人文・印哲印文・修士課程修了，1996 同大学院人社・インド文学インド哲学仏教学・博士課程退学。同年東文研助手。

研究活動の概要

サンスクリット文献のみならず，チベット訳・漢訳文献を用いての〈異訳対照研究〉によって，インドにおける大乘仏教経典の成立史・思想史の解明を目指す。従来，インド大乘経典の研究はサンスクリット資料を中心に行われてきた。しかしチベット訳・漢訳資料の総体は，サンスクリット資料のそれをはるかに凌駕している。さらに，成立時期も現存サンスクリット資料より古いことが多い。そのため，原典未回収の翻訳資料を放置したままでは，インド大乘経典史を解明することはできない。現在『大法鼓経』、『大雲経』、『金光明経』、『央掘魔羅経』、『涅槃経』、『法華経』などを中心に，〈異訳対照〉を通じて思想の系譜を辿っており，上記方法論を用いた経典史解明のケーススタディとなることを期している。

過去2年間の研究業績

『「大法鼓経」の研究序説—構成、及び経題に関して』『仏教文化』35 1996

学外活動

日本印度学仏教学会

丸尾 常喜 まるお つねき

略歴

1937.3 生。1962 東大・文・中文卒，同年大阪市立大大学院文学・修士課程入学，1964 同中退。1992 博士（文学・東大）。1962 私立啓光学園中・高校教諭，1964 熊本県立人吉高校教諭，1968 北大文学部助手，1973 同助教授，1990 東文研教授。1992～1995 文学部併任教授。

研究活動の概要

中国古典小説研究：歴史研究を中心とし，訳注書『中国小説の歴史の変遷—魯迅による中国小説史入門』などがある。

中国現代文学特に魯迅の研究：ほぼ二つの系統に分れる。第一は「狂人日記」の研究を出発点として魯迅文学に見えるその個人的あるいは民族的な羞恥（恥辱）

の意識のあり方とその変化を考察する諸論考で、評伝『魯迅——花のため腐草となる』の基礎となる。第二は阿Q=「阿鬼」説の提出にはじまり、一連の作品に伝統的な「鬼」の影像を見出し、魯迅の文学を「鬼が人となる」というテーマによってとらえる諸論考で、その主要部分は『魯迅——「人」「鬼」の葛藤』にまとめられている。

過去の主要業績（1994.3まで）

『魯迅文言語彙索引』（共編）東洋学文献センター叢刊 1981

『彷徨』（『魯迅全集』2）（訳）学習研究社 1984

『魯迅——花のため腐草となる』集英社 1985

『中国小説の歴史の変遷——魯迅による中国小説史入門』（訳注）凱風社 1987

『魯迅——「人」「鬼」の葛藤』岩波書店 1993

過去2年間の研究業績

「復讐と埋葬——『鑄劍』について」『日本中国学会報』46 1995

「翻訳と読解——魯迅在日本学者」（中国語）韓国中国現代文学学会『中国現代文学』8 1994

「精読——魯迅「社戯」（「村芝居」）」『中国語』1995. 4.~7

「“人”与“鬼”的糾葛——魯迅小説論析」（中国語，秦弓訳）人民文学出版社 1995

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科（1994・95年度），東京大学文学部（1994・95年度），東京大学教養学部（1994年度），二松学舎大学大学院文学研究科（1994・95年度），金沢大学文学部（1994年度），東北大学文学部（1995年度）

学外活動

日本中国学会（評議員・学術専門委員），東方学会（評議員・編集委員），中国社会文化学会（理事長），現代中国学会

尾崎 文昭 おざき ふみあき（1996.4 採用）

略歴

1947.6 生。1972 東大・文・中文卒，1975 東大大学院人文・中文・修士課程修了，1979 同博士課程退学。同年東大文学部助手，1980 中国・北京大学留学，1983 帰国し退職，1984 学習院大学非常勤講師，1985 明治大学文学部専任講師，1989 同助教授，1996 東文研教授。

研究活動の概要

主な研究テーマとして、二つが挙げられる。一つは、「五・四」退潮期（1920～25）の文学状況を中心とする中国現代文学史研究で、雑誌新聞等の原資料を通して当時の文学状況や思潮および主要人物間の思想的関係などを把握しようとしたものである。この延長で1930年代の北京・上海文壇の対立などにも手を伸ばした。第二には、魯迅・周作人兄弟の文学思想の解析および彼らを中心とする文学グループの関係のあり方について分析したものである。特に近年は、魯迅独特の思惟方式について研究を進めてきた。副次的には、中国現代詩および1980年代以後の思想文化また文学について関心をはらってきた。

過去の主要業績（1994.3まで）

「陳独秀と別れるに至った周作人——1922年非基督教運動の中での衝突を中心に」『日本中国学会報』35 1983

「『反差不多論争』（1937年）に見る沈從文と南北文壇の位置関係」『東洋文化』65 1985

「周作人の新村提唱とその波紋（上・下）」『明治大学教養論集』207・237 1988・1991

「『故郷』の二重性と『希望』の二重性——『故郷』を読む」『颯風』21 1988

「魯迅の『多疑』思惟方式についての試論」『魯迅研究の現在』汲古書院 1992

過去2年間の研究業績

シルビア・チャン「李沢厚と八十年代中国学術思潮」（翻訳）『中国——社会と文化』10 1995

「魯迅の『多疑』思惟方式についての研究」『明治大学人文科学研究紀要』39 1996

教育活動

明治大学文学部（1994・95年度）、日本大学文理学部中国文学科（1994・95年度）

学外活動

中国社会文化学会、日本中国学会、現代中国学会、中国語学会

笠井 直美 かさい なおみ

略歴

1965.11生。1987中国・山東大学留学（1988まで）、1989東大・文・中文卒、

1991 東大大学院人文・中文・修士課程修了，同年同博士課程入学，1992 学術振興会特別研究員（1993 まで），1993 東大大学院・人文・中文・博士課程退学。同年東文研助手。

研究活動の概要

研究の基本テーマは、中国俗文学（小説、戯曲、説唱、語り物等。時代としては元～清代）を主要な材料として、前近代中国における「正しさ」や「秩序」に関わる物の見方、考え方を、できるだけ広く、なるべく下層にわたって明らかにすることである。これまでは、特に小説『水滸伝』とそれに関連する戯曲を中心に、その成立・流伝・分化・受容の様相を検討し、当時の批評とあわせて、秩序を逸脱すること・逸脱した者への「正しさ」の付与の是非・その際の「正しさ」の由来と基準等について、特にこれらの点に関する各テキスト間の認識の分岐・断層について、考察を試みてきた。現在は、材料を講史・公案ものなど、『水滸伝』関連以外の題材の俗文学諸作品に広げると共に、俗文学以外の、上記の問題に関連する諸言説もなるべく広く検討することにより、こうした俗文学諸作品の位置をより具体的・立体的に把握したいと考えている。

過去の主要研究業績（1994.3 まで）

- 「『義賊』の誕生— 雑劇『水滸』から小説『水滸』へ」『東洋文化』71 1990
- 「金陵世徳堂刊『水滸記』について」『東方学』83 1992
- 「隠蔽されたもう一つの『忠義』— 『水滸伝』の『忠義』をめぐる論議に関する一視点」『日本中国学会報』44 1992
- 「『水滸』における『対立』の構図」『東文研紀要』122 1993

過去2年間の研究業績

- 「水滸伝」「義賊伝説（中国の）」『歴史学事典第3巻 かたちとするし』1995
- 「金陵世徳堂刊『水滸記』（中国語）江蘇省社会科学院文学研究所明清小説研究中心『明清小説研究』1996年第1期 1996

教育活動

放送大学千葉学習センター（1994 年度）

学外活動

日本中国学会、東方学会、中国社会文化学会

小川 裕充 おがわ ひろみつ

略歴

1948.10 生。1973 東大・教養・教養卒，1977 東大大学院人文・美術史・修士課程修了，1979 同博士課程退学。文学修士。1979 東文研助手，1982 東北大学文学部助教授，1987 東文研助教授，1992 同教授。1990 ハイデルベルク大学客員教授，1993 北京日本学研究中心客員教授。

研究活動の概要

中国絵画を中心とする古代中世東アジア絵画史を主たる研究対象としている。具体的には、華北山水画と江南山水画の対立と総合の観点から中国山水画を把握してゆくことが第1点。陰陽五行説に基づく東アジア障壁画の構成原理が、個々の造形作品にどのように実現されているのかを解明してゆくことが第2点。東アジア花鳥画の古典としての「六鶴図」の展開を跡づけることが第3点である。

上記の個人的な研究活動の支えとなっているのが、無慮10万点に及ぶ東アジア美術研究室所蔵中国絵画写真資料であり、その維持・拡大も研究活動の本質的な部分をなす。現在、国内外の第2次包括的調査をほぼ終了し、公開に向けて資料整理を継続中である。

過去の主要研究業績（1994.3 まで）

「唐宋山水画史におけるイメージーション（上）（中）（下）」『国華』1034・1035・1036 1980

「院中の名画—董羽・巨然・燕肅から郭熙まで」『鈴木敬先生還暦記念 中国絵画史論集』吉川弘文館 1981

『中国の花鳥画と日本』（共著）学習研究社 1983

「大仙院方丈襖絵考（上）（中）（下）」『国華』1120・1121・1122 1989

「相国寺蔵 文正筆 鳴鶴図（対幅）（上）（中）（下）」『国華』1166・1181・1182 1993・1994

過去2年間の研究業績

「武元直の活躍年代とその制作環境について」『美術史論叢』11 1995

「大仙院方丈の所謂『増築』問題について」『美術史論叢』11 1995

「日本の東方美術研究近況」『美術史論』1995年第2期

「徽宗筆 瑞鶴図卷」『美術史論叢』12 1996

「呉鎮 漁父図」「倪瓚 容膝齋図」「王蒙 具区林屋図」「冷謙白岳図」『東方』157-60 1994

他23点

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部（1994・95年度）、大阪大学大学院文学研究科・文学部（1994年度）、東北大学大学院文学研究科・文学部（1995年度）、九州大学大学院文学研究科・文学部（1995年度）

学外活動

美術史学会（常任委員）、東方学会、美学会、文化財保存修復学会、密教図像学会

林 秀薇 りん しゅううえい（1995.3 退職）

略歴

1961.1 生。1984 国立台湾大・文学部卒、1985 東大大学院人文・外国人研究生、1987 東大大学院人文・美術史・修士課程入学、1989 同修了、1990 同博士課程退学。同年東文研助手、1995 同助手退職、同年武蔵野美術大学非常勤講師。

研究活動の概要

研究分野は、中国南宋時代の道釈人物画研究と元代の白描画研究の二つに分けられる。主に、南宋の中心的な画家である梁楷の研究と、梁楷の画風を継承した元代の文人画家趙孟頫の白描画の作品に集中している。梁楷研究は、よりグローバルな立場から、南宋道釈人物画についての日本側の見解に、梁楷独自の白描的筆法を見直すことによって新しい視点を加えようと試みた。この視点から、中国絵画の筆法についての諸側面、特に梁楷をはさんで北宋から元代までに至る白描画の諸相をさらに具体的な作例を分析し、元代の白描画研究の分野までに展開したわけである。とりわけ、梁楷の人物画と趙孟頫の山水画に共通に使用される渴筆という特殊な白描的筆法に注目している。元代からの文人山水画の主流となった渴筆山水画の成立についての問題を、趙孟頫の「水村図巻」にみる白描の筆法への受容と変容から考える。筆法を中心に画風の系譜づけをする方法に、北宋から元代への文人画の展開を把握しようとするのである。

過去の主要業績（1994・3 まで）

「梁楷研究序説 — [李白吟行図] から『図絵宝鑑』の梁楷伝記まで」『東文研紀要』117 1992

「白描的画風と渴筆山水画の成立について」『美術史論叢』11 1995

過去2年間の研究業績

『海外所在中国絵画目録 改訂増補版』（アメリカ・カナダ編 上 本文編下

教育活動

埼玉大学教養学部 (1994 年度), 武蔵野美術大学 (1995 年度)

南アジア部門

加納 啓良 かのを ひろよし

略歴

1948.3 生。1970 東大・経卒。1990 経済学博士 (東大)。1971 アジア経済研究所, 1980 東文研助教授, 1991 同教授。

研究活動の概要

ジャワの農村地域を主な対象に, インドネシア経済の歴史と現状を, 東南アジアの他の国々, 地域や日本, 台湾などの場合との比較を念頭に置きながら研究を進めてきた。当初は現地での個別村落の事例調査による現状分析に力点を置いたが, その後は諸種の統計資料なども用いた鳥瞰的研究と植民地期の資料による歴史研究にも対象を広げてきた。最近数年間は, オランダ, インドネシアの歴史家や人類学者と, 中部ジャワ北海岸の一地方における農村社会経済構造の長期的変化についての国際共同研究を推進し, その成果のとりまとめに精力を注いできた。また, 国際経済的な視野から東南アジアの貿易構造の歴史的变化についても関心をもち始めている。

過去の主要業績 (1994.3 まで)

- 『バグララン—東部ジャワ農村の富と貧困』アジア経済研究所 1979
- 『サワハン—「開発」体制下の中部ジャワ農村』アジア経済研究所 1981
- 『中部タイ稲作農村の経済変容』(共著) 東京大学東洋文化研究所 1986
- 『インドネシア農村経済論』勁草書房 1988
- 「ジャワ村落史の検証—ウンガラン郡の事例」『東文研紀要』111 1990

過去2年間の研究業績

- 『中部ジャワ農村の経済変容—チョマル郡の85年』(編著) 東文研叢刊 東京大学出版会 1994
- Di Bawah Asap Pabrik Gula: Masyarakat Desa di Pesisir Jawa Sepanjang Abad Ke-20*, Yogyakarta, 1996.

- 「近代アジアの社会変容—ジャワ、台湾の糖業を事例として」土屋健治編『講座現代アジア 1 ナショナリズムと国民国家』東京大学出版会 1994
- 「農民革命の政治社会学—東南アジアからの試論」坂本義和編『世界政治の構造変動 3 発展』岩波書店 1994
- 「国際貿易から見た 20 世紀の東南アジア植民地経済—アジア太平洋市場への包摂」『歴史評論』539 1995
- 「『フロンティア』とジャワニサシ」『総合的地域研究』8 1995
- “Sentralisme Keuangan dan Prospek Pembangunan Daerah Otonom di Indonesia,” in D.J. Rachbini et al., eds. *Negara dan Kemiskinan di Daerah*, Jakarta, 1995.
- 「農業の変容」安中章夫・三平則夫編『スハルト政権下のインドネシアの政治と経済』アジア経済研究所 1996

他 1 点

教育活動

東京大学教養学部教養学科（1994・95 年度）、東京大学経済学部（1995 年度）、東京大学大学院経済学研究科（1994・95 年度）

学外活動

アジア政経学会（理事）、東南アジア史学会、日本インドネシア NGO ネットワーク代表

高橋 昭雄 たかはし あきお（1996.4 採用）

略歴

1957.4 生。1981 京大経卒。1993 博士（経済学・京大）。1981 アジア経済研究所入所、1986 ランゲーン外国語学院留学（1988 まで）、1993 ミャンマー農業省農業計画局客員研究員（1995 まで）、1996 アジア経済研究所退職、同年東文研助教授。

研究活動の概要

ミャンマーの農村地域を主なフィールドとして、植民地期からの歴史を踏まえながら、農村経済の現状に関する研究を行ってきた。この研究は、ミャンマーの経済史に関する文献資料の研究と、農村の社会経済構造と庶民の政策への対応過程の相互関係を解明するための実態調査のふたつの方向から進められた。社会主義政権期の農村経済を研究した下記の著作『ビルマ・デルタの米作村』は、その

ような調査研究の一応の成果である。

今後は、1994～95年にかけて行った農村調査をもとに、「市場経済体制」移行下での農村経済の変容とそこから照射した体制の性格の分析を、他の東南アジア地域および日本との比較を念頭におきながら、進めていく方針である。

過去の主要業績（1994.3まで）

「植民地統治下の下ビルマにおける『工業的農業』の展開：ファーニバル説の再検討」『アジア経済』26-11 1985

「下ビルマ米作村における農地政策の展開，1957～1987年」『アジア経済』31-2 1990

「ビルマ式社会主義下の農地保有：下ビルマ米作村の事例」『アジア経済』31-3 1990

『ビルマ・デルタの米作村：『社会主義』体制下の農村経済』（研究双書 423）アジア経済研究所 1992

「上ビルマ灌漑村における農地保有と農産物の商品化：下ビルマ農村との比較」梅原弘光編『東南アジアの土地制度と農業変化』アジア経済研究所 1991

過去2年間の研究業績

「ミャンマー・市場経済体制移行下での米増産『計画』」『アジア研究』160 1994

「ビルマ人の葬儀と墓」小島麗逸編『アジア墳墓考』勁草書房 1994

「上ビルマ農村の農外就業と階層構造：社会主義末期の一灌漑村を事例として」水野広祐編『東南アジア農村の就業構造』アジア経済研究所 1995

「チャウセー地方の河川灌漑と農業」堀井健三・篠田隆・多田博一編『アジアの灌漑制度：水利用の効率化に向けて』新評論 1996

学外活動

アジア政経学会，東南アジア史学会

柳澤 悠 やなぎさわ はるか

略歴

1944.11 生。1967 東大・経卒，1970 東大大学院経済・応用経済学専攻・修士課程修了（経済学修士），1972 同博士課程退学。1993 博士（経済学，東京大学）。1972 横浜市立大学文理学部専任講師，1976 同助教授，1983 東文研助教授，1989 同教授。

研究活動の概要

南インドを主たる対象とした近現代インド経済史で、中心的課題は農業・農村構造の歴史的な分析である。政府公文書などの分析や村落土地査定台帳の電算機による集計・分析によって、19世紀以降1980年代までの、村落内諸階層の土地所有関係、雇用関係や小作関係の変容を考察し、下位カーストの農業労働者層の社会的経済的な自立傾向の強まりを指摘した。これに加えて、インドの在来手工業や農村小工業についても検討した。20世紀前半の南インドで見られた手織業・精米業・繰綿業・搾油業などの発展を、下層階層の自立性の強化に随伴する、この階層の消費パターンの変化と関連づけて把握した。1930年代の日印会商やインド労働市場についても若干の考察を加えた。

過去の主要業績（1994.3まで）

Socio-economic Changes in a Village in the Paddy Cultivating Area in South India,
Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa
(ILCAA), Tokyo, 1985.

『20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動』（水島司氏と共著）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1988

“Mixed Trends in Landholding in Lalgudi Taluk: 1895-1925,” *Indian Economic and Social History Review* 26-4, 1989.

『南インド社会経済史研究』（東京大学東洋文化研究所）東京大学出版会 1991

“The Handloom Industry and Its Market Structure: The Case of the Madras Presidency in the First Half of the Twentieth Century,” *Indian Economic and Social History Review* 30-1, 1993.

過去2年間の研究業績

『カースト制度と被差別民 第4巻 暮らしと経済』（編著）明石書店 1994

Local Agrarian Societies in Colonial India: Japanese Perspectives, co-edited with Peter Robb and Kaoru Sugihara, Curzon Press, London, 1996.

History and Society in South India, co-edited with Tsukasa Mizushima, ILCAA, 1996.

A Century of Change: Caste and Irrigated Lands in Tamilnadu, 1860s-1970s, Manohar, Delhi, 1996.

“Element of Upward Mobility for Agricultural Labourers in Tamil Districts, 1865-1925” and “A Comparison with the Japanese Experience,” in P. Robb et al., eds., *Local Agrarian Societies in Colonial India: Japanese Perspectives*, Curzon Press, London, 1996.

「南インドにおける小農化傾向と農村小工業」宮嶋博史編『講座 アジアから考える 第6巻 長期社会変動』東京大学出版会 1994

「農村社会の経済変化と諸カースト—下層階層を中心に」押川文子編『カースト制度と被差別民 第5巻 フィールドからの現状報告』明石書店 1995

“Change in Paddy Yield per Acre in Tamilnadu: A Consideration of Statistics,” Discussion Paper, 96-1, January 1996, Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.

他に論文3点, 書評1点, その他3点

教育活動

東京大学経済学研究科 (1994・95年度), 東京大学総合文化研究科 (1994・95年度), 東京大学教養学部 (1994・95年度)

学外活動

日本南アジア学会 (理事), 国際経済学会, 土地制度史学会, アジア政経学会, 社会経済史学会, 歴史学研究会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員

中里 成章 なかざと なりあき(1994.10 配置換)

略歴

1946.12 生。1972 東大・文・東洋史卒, 1975 東大大学院人文・修士課程修了, 1977 東大大学院博士課程中退。1987 哲学博士 (Ph. D. カルカッタ大学)。1977 東文研助手 (1983 まで), 1987 (財) 東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター調査資料室長, 1988 神戸大学文学部助教授, 1994 東文研教授。1993 ロンドン大学 SOAS 客員研究員。

研究活動の概要

これまで主な研究テーマとしてきたのは, 植民地支配期インドのベンガル地方の社会経済史である。この分野での主要な研究成果は英文の著書にまとめられている。この著書では, 18世紀末にイギリスが導入した土地制度であるザミンダリー制が, その100年後, 東ベンガル地方でどのように機能していたかを, 土地所有の実態, 地代徴収のシステム, 土地市場の動向の三つの角度から分析した。またもう一つのテーマとして, インド国民軍を中心とする第二次大戦期の日印関係や, それと密接に関わるインド独立の問題に関心をもってきた。最近, この方面の問題関心を発展させて, インド・パキスタン分離独立の社会的・経済的背

景を解明する仕事に取り組んでいる。

過去の主要業績（1994.3 まで）

「インド国民軍裁判をめぐる」長崎暢子編『南アジアの民族運動と日本』アジア経済研究所 1980

「ベンガルにおける土地所有権の展開」『歴史と地理』402 1989

“The ‘Mobs’ in the Calcutta Communal Riot of 1946,” in T. Yukawa, ed., *The Proceedings of International Conference on Urbanism in Islam*, 5 vols., Tokyo, 1989, vol. 5.

“Superior Peasants of Central Bengal and Their Land Management in the Late Nineteenth Century,”『南アジア研究』2 1991

Agrarian System in Eastern Bengal c.1870-1910, Calcutta, 1994.

過去2年間の研究業績

“Survey of Research Institutions in India (3),” *Asian Reserch Trends* 4, 1994.

「18世紀末ベンガル農村における土地保有とカースト——ビルブム県シュルル村の検地帳に見る」柳沢悠編『カースト制と被差別民第四巻 暮らしと経済』明石書店 1995

「太平洋戦争とインド」『創文』367 1995

「日本における発展途上国研究（1986～94）：インド—経済史」『アジア経済』36-6・7 1995

「ベンガルにおける土地所有制の展開と地域性」『総合的地域研究』（成果報告書シリーズ）9 1995

“Regional Pattern of Land Transfer in Late Colonial Bengal,” in Peter Robb et al., eds., *Local Agrarian Societies in Colonial India*, London, 1996.

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科（1994・95年度）、東京大学大学院総合文化研究科（1994・95年度）、東京大学文学部（1995年度）、東京大学教養学部（1995年度）、東京大学教養学部教養学科（1995年度）、東京外国語大学外国語学部（1995年度）

学外活動

日本南アジア学会, Indian History Congress, Asiatic Society of Bangladesh

井坂 理穂 いさかりほ (1995.4 採用)

略歴

1969.8 生。1992 東大・教養・教養卒, 1994 東大大学院総合文化・地域文化・修士課程修了, 同年東大大学院総合文化・地域文化・博士課程入学, 1995 東大大学院総合文化・地域文化・博士課程退学。同年東文研助手。

研究活動の概要

植民地期の西インドにおける政治・社会史を扱っている。特に 19 世紀後半の都市中間層を分析し、彼らの「国家」像, 及びアイデンティティのあり方を明らかにすることを目指している。現在進めているのは、西インドの商工業都市・アムダーヴァードにおける社会・文化活動である。今後、この都市中間層の分析を 20 世紀初期にまで広げ、ガンディーの反英運動との関連を検討する予定である。また以前に独立前後の代表的政治家であるヴァッラブバーイー・パテルの国家構想を論文テーマとして扱ったが、西インド・グジャラート出身のこの政治家を、都市中間層分析の枠組みから再度検討したいと考えている。

過去 2 年間の研究業績

「インド独立と藩王国の統合—藩王国省のハイダラーバード政策」『アジア経済』36-3 1995

学外活動

日本南アジア学会, 南アジア研究会, 東方学会

上村 勝彦 かみむら かつひこ

略歴

1944.3 生。1967 東大・文・仏文卒, 1970 東大大学院人文・印哲・修士課程修了, 1971 同博士課程退学。1988 文学博士 (東大)。1971 東大文学部助手, 1973 財団法人東方研究会専任研究員, 1978 国学院大学文学部専任講師, 1980 同助教授, 1986 東文研助教授, 1989 同教授。

研究活動の概要

最近の研究活動は主として二つの領域に分類され得る。第一は、修士論文以来続行してきたサンスクリット詩論に関する研究である。南インドのマドラスに滞在中に着手したラサ (美的陶酔) の理論の研究は、博士論文『インド古典演劇論における美的経験』として結実し、1990 年に東洋文化研究所 (東京大学出版会)

から出版された。アーナンダヴァルダナの詩論書『ドゥヴァニ・アーローカ』の翻訳は完了し、目下その研究に従事している。

第二は叙事詩『マハーバーラタ』の翻訳と研究である。『バガヴァッド・ギーター』の翻訳といくつかの研究論文を発表し、目下『マハーバーラタ』の翻訳の仕事を続行している。

過去の主要業績（1994.3 まで）

『屍鬼二十五話』（訳）東洋文庫 325 1978

『インド神話』東京書籍 1981

『カウティリヤ実利論』（訳）（上下）岩波文庫 1984

『インド古典演劇論における美的経験—アピナヴァグプタの rasa 論』東文研報告 1990

『バガヴァッド・ギーター』（訳）岩波文庫 1992

過去2年間の研究業績

「アーナンダヴァルダナの矛盾」『印度哲学仏教学』9 1994

「Dhvanyāloka 訳注 補遺 (1)(2)」『東文研紀要』126・129 1995・96

『古代インドの宗教』日本放送出版協会 1995

「インド古典のことわざ」『世界ことわざ大事典』大修館 1995

教育活動

東京大学教養学部(1994・95年度), 東京大学人文社会系研究科(1994・95年度)

学外活動

日本印度哲学仏教学会（評議員）、日本仏教学会、仏教思想学会（評議員）、日本南アジア学会、インド思想史学会（理事）、財団法人東京大学仏教青年会（理事長）

永ノ尾信悟 えいのおしんご

略歴

1948.7 生。1971 京大・文・哲学卒, 1973 京大大学院文学・梵語学梵文学修士課程修了, 1976 同博士課程退学, 同年学術振興会奨励研究員(1977 まで), 1977 西ドイツ・マールブルク大博士課程入学, 1980 同退学。1986 哲学博士 (Ph.D. マールブルク大)。1980 九州東海大学専任講師, 1984 国立民族学博物館助手, 1987 同助教授, 1989 総合研究大学院助教授併任, 1991 東文研助教授, 1994 同教授。

研究活動の概要

1984年より勤務した国立民族学博物館在職中より数回インドに滞在し、北インドの農村で伝統的なバラモン達の儀礼を見る機会を得た。修士課程在学中より研究していた古代インドのヴェーダ祭式との大きな差に気付き、最後期ヴェーダ文献からブラーナ文献などを中心に、現在にまで伝えられているヒンドゥー儀礼の形成と変遷を研究。また、北インドのミティラー地方の言語を修得し、そのミティラー語で歌われる低カーストの人々の儀礼の歌を採集し、分析、研究を行っている。民衆を主体としたヒンドゥー教のあとひとつ重要な活動である聖地巡礼に関しても、北インドの聖地を訪れたり、ブラーナ文献の中の聖地に関する文献を研究している。

過去の主要業績（1994.3まで）

Die Cāturmāsya oder die altindischen Tertialopfer. Dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras, Monumenta Serindica 18, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo, 1988.

“Changes in Hindu Ritual: With a Focus on the Morning Service,” *Senri Ethnological Studies* 36, 1993.

「ブラーナ文献が記述する秋の女神の大祭」『東洋文化』73 1993

「グリフヤストラ文献にみられる儀礼変容」『東文研紀要』118 1992

「Mahādevapūjā—Mithilā 地方の事例報告」『国立民族学博物館』14 1989

過去2年間の研究業績

「1993年の歴史学界—回顧と展望 南アジア・古代」『史学雑誌』103-5 1994

“The Nāgapañcamī as described in the Purāṇas and its Treatment in the Dharmanibandhas,” *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 6, 1994.

“Analysis of the Ritual Structure in the Nīlamata,” in Y. Ikari, ed., *A Study of the Nīlamata: Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir*, Institute for Research in the Humanities, Kyoto University, 1994.

「文献学者とフィールドワーク」『民博通信』67 1995

『ヒンドゥー教年中儀礼の形成—ティティと神格の結びつきをめぐって』
Monumenta Serindica 26, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1995

「酒をつくる花マフア—インド」山本紀夫・吉田集而編著『酒づくりの民族誌』八坂書房 1995

「古代インドの酒 スラー」山本紀夫・吉田集而編著『酒づくりの民族誌』八

坂書房 1995

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科 (1994・95年度), 中央大学総合政策学部 (1995年度)

学外活動

日本南アジア学会 (常務理事・編集委員) (1994年度), 日本南アジア学会 (常務理事・編集委員長) (1995年度), 東京外国語大学・AA研共同研究員(1994.4~1996.3)

西アジア部門

鈴木 董 すずき ただし

略歴

1947.9生。1970東大・法卒, 1972東大大学院法学・政治・修士課程修了, 同年トルコ国・イスタンブール大学留学 (1975まで), 1979東大大学院博士課程退学, 同年学術振興会奨励研究員, 1980立大法学部助手, 1982同退職, 同年千葉大学教養部等非常勤講師, 同年東大大学院法学・政治・博士課程修了, 法学博士 (東大)。1983東文研助教授, 1991同教授。

研究活動の概要

現在のところ, 研究対象は, かつてのオスマン帝国を中心とする西アジア地域である。研究テーマとしては, オスマン帝国のケースを中心に, イスラム世界における, 1)政治体の支配組織と支配エリート, 2)世界秩序・政治的統合・アイデンティティー, 3)文化と社会の特質, の3分野にわたる。そのうち, 最も中心的テーマは, 前近代のオスマン帝国の支配組織と支配エリートについてであり, 個々の支配エリートについての徹視的なプロソフोगラフイー的研究を進めつつ巨視的なエリートと支配組織の変遷史を構築しつつある。2)については, 前近代におけるイスラム世界秩序の特質とその解体期における統合とアイデンティティーの変容を追求中。

過去の主要業績 (1994.3まで)

『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会 1993

『イスラムの家からバベルの塔へ——オスマン帝国における諸民族の統合と共存』

リポート 1993

『図説 イスタンブル歴史散歩』河出書房新社 1993

『オスマン帝国—イスラム世界の柔らかい専制』講談社現代新書 講談社 1992

「スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (1)~(3)」『東文研紀要』
101・103・106 1986~88

過去2年間の研究業績

『食はイスタンブルにあり』NTT出版 1995

『中東人国記』(編著) 綜合法令 1994

『イスラームの世界史』(共編著) 全3巻 講談社現代新書 講談社 1994

「バクス・イスラミカから現代世界へ」小杉泰編『イスラームに何が起きているか—現代世界とイスラーム復興』平凡社 1996

「世界秩序・政治単位・支配組織—比較のなかの後期イスラム帝国としてのオスマン帝国」『東洋文化』75 1995

「イスラムと国際関係」平野健一郎編『講座 現代アジア』4 東京大学出版会 1994

「組織と支配—後期イスラーム帝国オスマン朝の場合」後藤明編『講座 イスラーム世界』2 栄光教育文化研究所 1994

「伝統的オスマン社会における奴隷の諸相」『歴史学研究』664 1994

他15点

教育活動

東京大学大学院法学政治学研究科(1994・95年度), 東京大学大学院人文社会科学系研究科(1994・95年度), 東京大学大学院総合文化研究科(1994・95年度), 慶応義塾大学大学院文学研究科(1995年度), 慶応義塾大学文学部(1995年度), 青山学院大学国際政治経済学部(1995年度), 横浜市立大学大学院国際文化研究科(1994・95年度)

学外活動

国際日本文化研究センター共同研究員, 比較法史学会(理事), 地中海学会(常任委員), 日本オリエント学会(『オリエント』編集委員), 日本中東学会(評議員), 日本国際政治学会(評議員)

長澤 榮治 ながさわ えいじ (1995.4 採用)

略歴

1953.4 生。東大・経卒。1976 アジア経済研究所入所，1981 エジプト派遣 (1983 まで)，1995 東文研助教授。

研究活動の概要

エジプトを中心に近現代アラブの社会経済史研究に取り組んできた。主要な研究テーマは、次の四つの領域に区分できる。第一は、近代エジプトの綿花経済の形成に関する研究であり、とくに農村移動労働者や、灌漑制度の変容の問題を中心に考察してきた。また、綿花経済の歴史的な性格をめぐる農業資本主義論争を、共産主義運動の展開との関連から分析した。第二は、労働移動の問題を中心とした労働経済学的研究、第三は、エジプト農村を事例とする社会学的研究である。後者では、具体的なテーマとして農村の権力構造や、都市移住に伴う連帯意識の変容などを分析した。第四は、知識人論と民衆的思想遺産を中心とした現代アラブ思想研究である。

過去の主要業績 (1994.3 まで)

『東アラブ社会変容の構図』(編著)アジア経済研究所 1990

『中東 政治・社会』<地域研究シリーズ第10巻>(編著)アジア経済研究所 1991

「世界綿業の展開とエジプト農村の労働力問題」『世界の構造化』<シリーズ世界史への問い第10巻> 岩波書店 1991

「都市化と社会的連帯—上エジプト農村とアレキサンドリア市港湾労働者社会との事例比較」加納弘勝編『中東の民衆と社会意識』アジア経済研究所 1991

「現代アラブ思想研究のための覚書—思想的危機と第2のナフダ」伊能武次編『中東諸国における政治経済変動の諸相』アジア経済研究所 1993

過去2年間の研究業績

「『石油の富』と移民労働—中東産油国への労働力移動」森田桐郎編『国際労働移動と外国人労働者』同文館 1994

「近代エジプトの村長職をめぐる権力関係」伊能武次編『中東における国家と権力構造』アジア経済研究所 1994

「エジプト—灌漑制度改革の新段階」堀井健三・篠田隆・多田博一編『アジア諸国の灌漑制度—水利用の効率化に向けて』新評論社 1996

“An Autobiography as Case Study of an Egyptian Sociologist: Sayyid

'Uways, *The History which I Carry on My Back,*" *Mediterranean World* XIV, 1995.

「書評 加藤博著『私的土地所有権とエジプト社会』」『アジア経済』36-10
1995

他9点

教育活動

東洋大学経済学部（1994年度）、東京大学大学院総合文化研究科（1995年度）、
東京大学大学院経済学研究科（1995年度）、一橋大学経済学部（1995年度）

学外活動

日本中東学会（評議員）、日本イスラム協会、国立民族学博物館共同研究員

松谷 敏雄 まつたに としお

略歴

1937.3 生。1961 東大・教養・教養卒、1963 東大大学院生物・人類学・修士課程修了、文学修士、1965 同博士課程退学。1965 東文研助手、1972 同専任講師、1974 同助教授、1984 同教授。1992 東文研所長及び東大評議員並びに東洋学文献センター長（1994まで）。

研究活動の概要

1964年にイラク・イランでの発掘調査に参加して以来、今日に至るまで一貫して、両国やシリアでの考古学的発掘に従事してきた。西アジアは、自然界に存在する食料を獲得する経済から人類自らの手で食料を生産する経済へと地球上で最も早くに移行した地域である。こうした人類史上の画期的な変化を遺跡から得られる実証的な証拠により跡づけるのが主たる関心事といえる。したがって、手がけてきた遺跡は、ごく初期の農耕集落址の残されている諸遺跡である。イラクではテル・サラサート遺跡第2号丘がそれに該当する。1985年からは自ら調査団を組織し、シリアで発掘調査を実施してきた。カシュカシヨクⅡ号丘、コサック・シャマリの2つの遺跡を発掘した。

過去の主要業績（1994.3まで）

「初期農村村落の研究」『東文研紀要』47 1967

「ビゼとチネ」『東文研紀要』58 1972

共編 *Telul eth-Thalathat* 東文研報告Ⅲ-Ⅳ 1975・1981.

共編 *Halimehjan* 東文研報告Ⅰ-Ⅱ 1980～82.

編 *Tell Kashkashok: The Excavations at Tell No. II*, 1991.

過去2年間の研究業績

監訳『古代のメソポタミア』朝倉書店 1994

Y. Nishiaki と共著 “Preliminary Report on the Archaeological Investigations at Tell Kosak Shamali, The Upper Euphrates, Syria: the 1994 Season,” *Akkadica* 93, 1995.

「なぜ西アジア新石器時代を研究するのか」常木晃・松本健編『文明の原点を探る—新石器時代の西アジア』同成社 1995

西秋良宏と共著「シリアの先史時代遺跡、テル・コサック・シャマリの調査（1993—1994年）」松本健編『平成6年度西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究—第2回西アジア発掘調査報告書』クバプロ 1996

“The Functions of Bedrock Pits from Pottery Neolithic Sites in North Mesopotamia,” co-author, Y. Nishiaki, *Subartu* IV (forthcoming in 1996).

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科（1995・96年度）、東京大学大学院総合文化研究科（1995・96年度）

学外活動

日本オリエント学会（理事）、日本学術会議・東洋学連絡委員会委員、古代オリエント博物館評議員、流沙海西契学会運営委員長

羽田 正 はねだ まさし

略歴

1953.7生。1976京大・文・史学卒、1978京大大学院文学・東洋史・修士課程修了、同年同博士課程進学、1980パリ第3大留学、1984京大大学院博士課程退学、1984イラン学第3期博士（パリ第3大）。1984学術振興会奨励研究員、1985京大文学部研修員、1985学術振興会特別研究員、1986京都橘女子大学文学部助教教授、1989東文研助教教授。

研究活動の概要

統一的であると同時に多様性も有するイスラム世界の中で、特に前近代イラン・イスラム世界を研究対象とし、以下の3つの柱に沿ってその特徴を抽出、解明することに努めている。

第1の柱は、16世紀から18世紀にかけてイランを中心とする世界を統治した

サファヴィー朝国家の政治史、制度史を主としてペルシア語文献を用いて研究することである。

第2は、前近代イラン・イスラム世界の都市とその社会におけるイラン・イスラム世界的な特徴を検証することである。都市名家、ワクフのあり方、都市のトポグラフィなどが中心的なテーマである。

第3は、イランのみならずイスラム世界全般の宗教建築（モスク、マドラサ、聖廟など）の研究である。現地調査によって、これら宗教建築の機能や建築史的な意味の解明に努めている。

過去の主要業績（1994.3まで）

Le chah et les Qizilbas. Le système militaire safavide, 1987.

『イスラム都市研究』東京大学出版会 1991

『モスクが語るイスラム史—建築と政治権力』中央公論社 1994

過去2年間の研究業績

Islamic Urban Studies: Historical Review and Perspectives (co-editor), Kegan Paul International Ltd., 1994.

「西アジア・インドのムスリム国家体系」『講座世界史2 近代世界への道』歴史学研究会編 東京大学出版会 1995

「イラン—前近代」『イスラム研究ハンドブック』（共著）栄光教育出版研究所 1995

『シャルダン『イスファハーン誌』研究—17世紀イスラム圏都市の肖像』東文研叢刊 東京大学出版会 1996

“The Character of the Urbanization of Isfahan in the Later Safavid Period,” *Pembroke Papers* 4, 1996

他6点

教育活動

東京大学大学院人文社会系研究科（1994・95年度）、東京大学大学院総合文化研究科（1994・95年度）、お茶の水女子大学文教育学部（1994年度）、山形大学文学部（1994年度）、大阪市立大学文学部（1994年度）

学外活動

日本中東学会（評議員）、日本オリエント学会（編集委員）、史学会（評議員）、日本イスラム協会（評議員）、東方学会、東洋史研究会、西南アジア研究会、日仏東洋学会（評議員）、内陸アジア史学会（常務理事）、Société asiatique, Association pour l'avancement des études iraniennes, Centre d'études islamiques et orientales d'histoire comparée (URA 1059, CNRS)、東京外国語大学・AA研共

同研究員（1994.4～1996.3）、国立民族学博物館共同研究員（1995.4～1996.3）

山中 由里子 やまなか ゆりこ

略歴

1966.1 生。1988 米国・カラマズー大学・仏語／美術卒，1991 東大大学院総合文化・比較文学比較文化・修士課程修了，同年東大大学院総合文化・比較文学比較文化・博士課程入学，同年学術振興会特別研究員（1993 まで），1993 東大大学院総合文化・比較文学比較文化・博士課程退学。同年東文研助手。

研究活動の概要

中東イスラム世界における「アレクサンドロス物語」の伝播と変容を研究課題としている。現在は，特にアレクサンドロスとアリストテレスの師弟関係がアラビア語・ペルシア語の教訓書，「君主の鑑」文学，物語等でどのように描かれているかを探ろうとしている。ギリシア・ローマ世界に流布していたとされるアリストテレスがアレクサンドロスに宛てた助言を含んだ書簡集がアラビア語に訳され，さらにペルシア文学に伝わった過程を追いながら文明圏同士の接触，交流について考察している。1994 年 10 月より学術振興会海外特別研究員としてパリで写本・資料の収集を行っている。

過去の主要研究業績（1994. 3 まで）

「美術史家としてのアーサー・ウェーリー——郭熙『林泉高致集』のフェノロサ訳及びウェーリー訳をめぐって」『比較文学研究』59 1991

「都市の誕生と死——アレクサンドロス伝説におけるアレクサンドリアとペルセポリス（上）（下）」『比較文学研究』61・62 1992

「明治日本人のペルシア体験——吉田正春使節団を中心に」『比較文学』35 1993

“From Evil Destroyer to Islamic Hero: The Transformation of Alexander the Great's Image in Iran,” 『日本中東学会年報』8 1993

過去 2 年間の研究業績

「文明を支えた空間——都市と建築」板垣雄三監修・後藤明編『文明としてのイスラーム——講座イスラーム世界 2』栄光教育文化研究所 1994

「砂漠の愛と詩と狂気——ライラとマジヌーンの物語」『創文』1994. 7

「グロッサリー」項目 三浦徹・東長靖・黒木英充編『イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所 1995

学会発表 “The Philosopher and the Wise King: Aristotle and Alexander the Great in Arabic and Persian Literature” 国際会議「アラブ世界における比較文学」1995年12月20～22日、於カイロ大学、エジプト

学外活動

東大比較文学会、日本比較文学会、国際比較文学会、日本中東学会、日本オリエント学会

後藤 明 ごとう あきら

略歴

1941.7生。1965東大・文・東洋史卒、1967東大大学院人文・東洋史・修士課程修了。1967(財)東洋文庫研究生、1968(財)東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター研究員、1978山形大学人文学部助教授、1986同教授、1987東文研教授。1994東文研所長及び東大評議員並びに東洋学文献センター長を併任(1996まで)。

研究活動の概要

- 1) 初期イスラーム世界史の基礎資料であるハディースの歴史資料としての有効性について引き続き検討を行った。
- 2) イスラーム世界の中核である中東地域の歴史を、イスラーム以前の中東の歴史と結びつける作業を継続した。
- 3) イスラーム世界の歴史の展開を、地球規模の人類史の中で位置付ける作業を継続した。
- 4) 現代のイスラーム世界と日本との関係を、エネルギー資源問題を軸に検討した。
- 5) アジアの伝統的法体系と近代法の関係を検討する研究会を組織した。
- 6) 日本におけるイスラーム都市性研究のレビューを行った。

過去の主要業績(1994.3まで)

『イスラーム世界の歴史』日本放送出版協会 1993

『事典 イスラームの都市性』(共編)垂記書房 1992

『メッカ—イスラームの都市社会』中央公論社 1991

『シリーズ・世界史への問い1 歴史における自然』(共編)岩波書店 1989

『ムハンマドとアラブ』朝日新聞社 1980

過去2年間の研究業績

『文明としてのイスラーム—講座イスラーム世界2』(編著)栄光教育文化研究所 1994

“A Challenge to the Notion of Islamic Cities,” *The Proceedings of the*

International Conference on Urbanism in Islam, The Middle Eastern Culture Center in Japan, Tokyo, 1994.

「人類史上のイスラーム」『文明としてのイスラーム—講座イスラーム世界2』
栄光教育文化研究所 1994

“Hadith as Historical Sources for a Biography of the Prophet,” *Orient* 30-31,
1995.

“Urbanism in Islam,” *Historical Studies in Japan VIII, 1988-1992*, Yamakawa
Syuppansya, Tokyo, 1995.

教育活動

東京大学大学院総合文化研究科（1994・95年度）、東京大学大学院人文社会系
研究科（1994・95年度）

学外活動

日本オリエント学会（理事・編集委員）、日本イスラーム協会（理事・編集委員）、
日本中東学会（理事）、史学会（評議員）、ナイル・エチオピア学会（評議員）、
（財）東洋文庫兼任研究員、国立民族学博物館共同研究員、国立民族学博物館地
域研究企画交流センター運営委員

鎌田 繁 かまだ しげる

略歴

1951.3 生。1974 東大・文・宗教学卒業、1976 東大大学院人文・宗教学・修士
課程修了、同年同博士課程進学、1977-81 マッギル大学イスラーム学研究所（カ
ナダ）留学、1982 東大大学院博士課程単位取得退学。同年東大文学部助手、
1984 東京外大外国語学部非常勤講師、1984 東文研助教授、1995 同教授。

研究活動の概要

人間とは何かという問いは、その人間のおかれた文化の脈絡に応じて様々に答
えられてきた。イスラームという宗教体系のなかでの解答を探るのが現在の研究
のねらいである。人間の本来の姿の実現である人間的完成は心の様態に大きくか
かっていると考えられ、イスラームの神秘家の宗教的「心」の記述を分析し理解
することから研究を進めている。近年はシーア派のイルファーンと呼ばれる神秘
思想での心（靈魂）の問題を主要な課題としている。しかしイルファーンはシー
ア派の思想的枠組みに大きく規定されているため、シーア派の知的営為全体を視
野に入れなくてはならず、シーア派それ自体の特性を考えることも研究の一課題

となっている。

過去の主要業績（1994.3 まで）

『モッラー・サドラーの靈魂論—『真知をもつ者たちの靈葉』校訂・訳注並びに序説』イスラム思想研究会 1984

『モッラー・サドラーの『万有婦神論』訳注』『東文研紀要』100 1986

“The First Being: Intellect (*'aql/khiradh*) as the Link between God's Command and Creation according to Abū Ya'qūb al-Sijistāni”『東文研紀要』106 1988

『イスラームにおける救済の前提—スンニー及びシーア・ハディースにおけるイマーム観』吉田泰編『救済の諸相』山本書店 1990

『超越と神秘—中国・インド・イスラームの思想世界』（森秀樹と共編著）大明堂 1994

過去2年間の研究業績

『イスラームにおける契約—原初の契約をめぐる』竹下政孝編『イスラームの思考回路—講座イスラーム世界 4』栄光教育文化研究所 1995

『イスラームと共同体』阿部美哉編『世界の宗教』（放送大学印刷教材）放送大学教育振興会 1995

“Metempsychosis (*tanāsukh*) in Mullā Ṣadrā's Thought,” *Orient* 30・31 [Special Issue: Studies by Members of the Society for Near Eastern Studies in Japan Dedicated to H.I.H. Prince Takahito Mikasa on the Occasion of His Eightieth Birthday], 1995.

『〈原初の契約〉について—ラーズィーの注釈より』『宗教研究』第68巻第4輯303号 1995

『シーア派等諸派』三浦・東長・黒木編『イスラーム研究ハンドブック』（講座イスラーム世界別巻）栄光教育文化研究所 1995

『イスラーム学』『宗教学がわかる』朝日新聞社アエラ発行室 1995

『シーア派資料における諸宗教の対論』『宗教研究』第69巻第4輯307号 1996

『紹介『講座イスラーム世界』』『オリエント』38-2 1996

他3点

教育活動

東京大学大学院人文科学研究科・人文社会系研究科（1994・95年度）、東京大学文学部（1994年度）、東京大学教養学部教養学科（1994年度）、東京外国語大学外国語学部（1994・95年度）、信州大学教養部・共通教育課程（1994・95年度）、

立教大学一般教育課程（1995年度）

学外活動

日本オリエント学会（和文『オリエント』編集委員）、日本宗教学会（評議員）、日本イスラム協会（評議員）、宝積比較宗教・文化研究所（理事）、宗教史学研究所、国立民族学博物館共同研究員

森本 一夫 もりもと かずお（1996.4採用）

略歴

1970.3生。1992 東大・文・東洋史卒、1995 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了、同年東大大学院人文社会・アジア文化研究・博士課程進学、1996 同退学。同年東文研助手。

研究活動の概要

イスラーム諸社会におけるサイド・シャリーフ—預言者ムハンマドの子孫・近親者—のあり方の比較史的研究を課題としている。修士論文「ターリブ家サイドの系譜統制」では、従来活用されていなかった史料類型「サイド系譜文献」を分析し、系譜の社会的統制の実態を解明するとともに、10、11世紀頃にイラン・イラクを中心に起こったサイド系譜学と系譜統制システムの確立過程を跡づけた。その後、この研究の一部を史料紹介「サイド系譜文献」と論文「サイド系譜学の成立」にまとめた。現在は、モロッコのシャリーフの研究に刺激されながら、10、11世紀のイラン・イラク社会でのサイドをめぐる社会的・政治的变化を明らかにしようと試みている。

過去2年間の研究業績

「サイド系譜文献—新史料類型の紹介」『アジア・アフリカ歴史社会研究』1

1996

「サイド系譜学の成立（十、十一世紀）—系譜統制との関わりを中心に」『史学雑誌』105-7 1996

学外活動

史学会、日本中東学会、日本イスラム協会

X 附属東洋学文献センター

東洋文化研究所附属東洋学文献センターは（以下、本文献センターと略す）、東洋学に関する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として1966年（昭和41年）に設置された。以来、アジア研究のための基本資料（中国・朝鮮関係図書、中国新聞・雑誌の影印本類、アラビア語写本蒐書「ダイバーコレクション」等アジア諸地域の文献、新聞）の収集を積極的に行い、これと並行して『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』、1995年度までに合計85輯を数える『東洋学文献センター叢刊』の刊行等ドキュメンテーション・サービス活動を進めてきた。その他、毎年全国各地の図書館の漢籍担当職員に対して研修を実施し、漢籍所在調査、漢籍貴重書複本化作業等を行っている。

しかし近年、本文献センターの情報サービス活動に対する要請はますます多様化しており、国内国外におけるアジア研究資料の所在調査、非ラテン文字言語資料の冊子体目録の作成とともに、データベース化を促進してサービスの飛躍的拡充を図ることが求められている。従って、本文献センターは現在の事業を強力に推進すると同時に、東洋文化研究所（以下、本研究所と略す）が所蔵する貴重な資料や文献情報を出来るだけ利用しやすい形で提供できるよう、情報検索システムの作成と長期的展望に基づく資料調査を遂行する必要がある。この第一段階として本文献センターは本研究所所蔵現代中国書（1912～1990年、約4万点）のデータベース化を行い、1995年度末にデータ入力が完了した。このデータファイルは冊子体（電字本）として1996年度の刊行が見込まれるほか、1997年度よりインターネットによる共同利用を予定しており、そのテストを開始したところである。以下に本文献センターの現状と展望を述べる。

1. 資料収集

文献センターは設立当初から近・現代中国書、前近代中国書および近現代朝鮮関係文献の資料収集と整理を進めており、当研究所未収の漢籍で他機関が所蔵する貴重書は、これをマイクロフィルムにより収集している。

また1981年度以来、清末・民国初年に刊行された新聞・雑誌の影印本類を収集し、閲覧に供している。さらに、近年広くアジア全域の現代社会研究が要請されているのに鑑み、1989年度から従来収集してきた中国の新聞の縮印版のみならず、アジア諸地域の新聞を全面的に収集する方針を立て、当面一国一紙をマイクロフィルムにより収集している。また、大型コレクションとして1987年度にアラビア語写本集成（ダイバーコレクションⅠ）を、1995年度にその続集（ダイバーコレクションⅡ）を購入した。

2. ドキュメンテーション・サービス

1) 東洋学文献センター叢刊

広くアジア研究のためのレファレンス用資料（書誌・目録・解題・索引・資料集等）を編集し、『東洋学文献センター叢刊』として刊行している。1995年度末までに叢刊65輯、叢刊別輯20輯、合計85輯を数えることとなった（本書123ページ以降の既刊リスト参照）。参考図書的需求は近年ますます増大しており、引き続き『許舒博士所蔵商業及土地契約文書 乾泰隆文書』の続刊、ならびに『海外所在中国絵画目録 改定増補版（東アジア編）』の刊行が見込まれている。また、バックナンバーの復刻として『仁井田隆博士輯 北京工商ギルド資料集』（1～6）等を決定している。なお、経費節減のため、65輯からは原則として電字本で刊行することとなった。『センター通信』は、本文献センターの活動報告、情報サービスに関する各方面からの提言などを中心に編集し、国内諸機関に配布している。1995年度までに36号を刊行した。

2) 東洋文化研究所蔵書の目録およびデータベースの作成

本研究所は、30万冊を越える漢籍並びに現代中国書を所蔵しており、漢籍については、『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』（本文編1973年、索引篇1975年、補訂合冊縮印版1981年、補訂合冊縮印版第2刷1996年）を刊行し、また、*Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of*

Oriental Culture, University of Tokyo [東京大学東洋文化研究所所蔵アラビア語写本(ダイバー・コレクション)目録](1988)を刊行した。現代中国書については、1990年度までに受け入れた約4万点をデータベース化し、1996年度には電字本『東洋文化研究所現代中国書分類目録・索引』の刊行を予定している。また、入力データの一部をインターネットにより利用するテストを1995年度より開始した。

3. 漢籍整理促進事業および漢籍所在調査

1980年度から毎年漢籍整理長期研修を実施している。諸大学・公立図書館の漢籍整理担当職員に対して、講義と実習の両面にわたる個別指導を行い、漢籍整理の専門知識と技能の向上をめざすもので、1995年度までに60機関91名の受講者があった。漢籍所在調査は、研修受講者が受講後その所属図書館の漢籍整理作業を行う際、要請により支援する形でリンクしており、1990年度以来、広島大学附属図書館所蔵斯波文庫の調査、目録原稿作成及び索引原稿作成を援助した。広島大学附属図書館においては、この調査を基礎に蔵書目録を編集中である。

4. 漢籍貴重書複本化

本研究所の漢籍の中には宋刊本・明刊本・朝鮮刊本等の貴重書が多数含まれている。このため、学内外のみならず、海外からも多数の利用者があり、図書の損耗も少なくない。貴重書は、文化財としても緊急に保全措置を取る必要に迫られていたが、1989年度から予算が配当され複本化を開始した。1991年度～1995年度は、研究所所蔵漢籍の根幹をなす大木文庫を中心に実施し、1995年度までに307点の複本を作成した。他方、諸機関からの複写依頼も増加しており、利用の便宜と原本の保全のため引き続き複本化を行う。

5. 全国文献・情報センター文献・情報共催セミナー

全国文献・情報センターは、5センターが収集してきた資料情報を広く研究者に提供するため1995年11月～12月に3回の共催セミナーを開催した。本文献センターは第1回全国文献・情報センター文献・情報共催セミナー(東アジア文献情報の現状と利用方法)の世話機関であった。

6. 今後の展望

本文献センターは、東洋文化研究所の全面的な協力を得てアジア研究の参考図書および目録編纂事業を電算化し、諸研究機関・研究者の共同利用に供するとともに、文献所在調査を粘り強く継続し、アジア研究資料のネットワーク作りを推進したい。具体的には、現在作成中の現代中国書データベースを大学間ネットワークシステムによって公開する。他方、本研究所は国際交流基金等の援助を得て香港大学との協定に基づき、香港に海外研究基地を設置した。本文献センターはこの研究基地を海外における資料収集の拠点として、香港、中国、シンガポール等の研究機関の蔵書調査を行いたい。

東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター叢刊既刊一覧（＊在庫なし）

- *第1輯 東洋文化研究所東洋学文献センター 新収図書目録（昭和41年度）
1968
- *第2輯 清代地方劇資料集（一） 1968
- *第3輯 清代地方劇資料集（二） 1968
- *第4輯 周揚著訳論文・周揚批判文献目録 1969
- *第5輯 郁達夫資料 1969
- *第6輯 東洋文化研究所東洋学文献センター 新収図書目録（昭和42・43年度） 1970
- *第7輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇（上） 1970
- *第8輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇（中） 1970
- *第9輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇（下） 1970
- *第10輯 李大釗文献目録 1970
- *第11輯 明刊元雜劇西廂記目録 1970
- *第12輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇・編著者名索引 1970
- *第13輯 魯迅全集注釈索引 1971
- *第14輯 1930年代中国文芸雑誌（一） 1971
- *第15輯 朝鮮研究文献目録論文・記事篇（Ⅰ） 1972
- *第16輯 朝鮮研究文献目録論文・記事篇（Ⅱ） 1972
- *第17輯 朝鮮研究文献目録論文・記事篇（Ⅲ） 1972
- *第18輯 郁達夫資料補遺（上） 1973
- *第19輯 切韻残卷諸本補正 1973

- ・第20輯 目録学 1973
- 第21輯 花間集索引 1974
- 第22輯 郁達夫資料補遺(下) 1974
- ・第23輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集(一) 1975
- 第24輯 江西蘇区文学運動資料集 1976
- ・第25輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集(二) 1976
- 第26輯 民国以来人名字号別名索引 1977
- 第27輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事總目(一)
1978
- 第28輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集(三) 1978
- 第29輯 中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録 1978
- 第30輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集(四) 1979
- 第31輯 儀礼疏攷正(上) 1979
- 第32輯 儀礼疏攷正(下) 1979
- 第33輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集(五) 1980
- 第34輯 小説月報(1920-1931) 總目録 1980
- 第35輯 コミンテルン定期刊行物 中国關係論説・記事索引 1981
- 第36輯 魯迅文言語彙索引 1981
- 第37輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事總目(二)
1981
- 第38輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事總目(三)
1983
- 第39輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集(六) 1983
- ・第40輯 東洋文化研究所所蔵 中国土地文書目録・解説(上) 1983
- 第41輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事總目(四)
1983
- 第42輯 校合本大越史記全書(上) 1984
- 第43輯 『植民地雜誌』(*Koloniaal Tijdschrift*) 所収論文目録 1984
- 第44輯 校合本大越史記全書(中) 1985
- 第45輯 江西蘇区紅色戲劇資料集 1985
- 第46輯 宋之間詩索引 1985
- 第47輯 校合本大越史記全書(下) 1986
- ・第48輯 東洋文化研究所所蔵 中国土地文書目録・解説(下) 1986
- ・第49輯 許舒博士所輯 廣東宗族契據彙録(上) 1987

- 第50輯 沈佺期詩索引 1987
- 第51輯 中華人民共和國・朝鮮民主主義人民共和國 職官歷任表 1987
- 第52輯 韓国政治エリート研究資料—職位と略歴 1987
- 第53輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目(五)
1988
- *第54輯 許舒博士所輯 廣東宗族契據彙録(下) 1988
- 第55輯 南嶽思大禪師立誓願文索引—六朝隋唐宗教・思想資料 1988
- 第56輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目(六)
1988
- 第57輯 郁達夫資料総目録附年譜(上) 1989
- 第58輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目(七)
1989
- 第59輯 郁達夫資料総目録附年譜(下) 1990
- 第60輯 山西票号資料書簡篇(一) 1990
- 第61輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目(八)
1990
- 第62輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目(九)
1991
- 第63輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目収載
雑誌名索引 1992
- 第64輯 許壽裳日記(自1940年8月1日至1948年2月18日) 1993
- 第65輯 許舒博士所藏 商業及び土地契約文書—乾泰隆文書(1) 潮汕地区土
地契約文書 1995
- *別輯1 東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録(書名・人名索引)・京都大学
人文科学研究所漢籍分類目録(書名・人名通檢)合併 四角號碼檢字表
1975
- *別輯2 海外所在中国絵画目録(アメリカ・カナダ編) 1977
- *別輯3 海外所在中国絵画目録(東南アジア・ヨーロッパ編) 1981
- *別輯4 日本所在中国絵画目録(寺院編) 1982
- 別輯5 LABRANG 李安宅の調査報告 1982
- *別輯6 日本所在中国絵画目録(博物館編) 1982
- *別輯7 日本所在中国絵画目録(個人蒐集編) 1983
- 別輯8 中国経済関係雑誌記事総目録(一)—『中外経済周刊』『経済半月刊』

『工商半月刊』 1983

- 別輯 9 孟郊詩索引(上) 1984
別輯 10 孟郊詩索引(下) 1984
別輯 11 中国經濟關係雜誌記事總目錄(二)—『國際貿易導報』 1985
別輯 12 中国經濟關係雜誌記事總目錄(三)—『中行月刊』 1985
別輯 13 『内務行政雜誌』所收論文・記事目錄 (A Catalogue of the articles in *Tijdschrift voor het Binnelandsch Betuur*) 1985
別輯 14 中国經濟關係雜誌記事總目錄(四)—『銀行週報』(上) 1987
別輯 15 春秋晋国『侯馬盟書』字体通覽—山西省出土文字資料 1988
別輯 16 中国經濟關係雜誌記事總目錄(五)—『銀行週報』(下) 1989
*別輯 17 海外所在中国絵画目錄 改訂増補版(ヨーロッパ編) 1992
*別輯 18 海外所在中国絵画目錄 改訂増補版(アメリカ・カナダ編 上 本文編) 1994
*別輯 19 海外所在中国絵画目錄 改訂増補版(アメリカ・カナダ編 下 索引編) 1994
別輯 20 『販書偶記』正統編合併刊行目錄 1995

漢籍所在調査報告書

1. 長崎大学附属図書館経済学部分館漢籍分類目錄・熊本大学附属図書館落合文庫漢籍分類目錄 1974
2. 新潟県立新潟図書館漢籍分類目錄・新発田市立図書館漢籍分類目錄 1982
3. 愛媛大学附属図書館漢籍目錄・書名人名索引 1984・1985

Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber [東京大学東洋文化研究所所蔵アラビア語写本(ダイバー・コレクション) 目錄] 1988



1996年11月18日

東京大学東洋文化研究所

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

電話 (03) 3812-2111 内線5833

ファクシミリ (03) 5684-5964

ホームページ URL <http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp>

印刷 三秀舎

デザイン 小山忠男

写真 鈴木昭夫・研究所スタッフ

東京大学
東洋文化研究所
要覧
1996



ファフルッディーン・ラーズィー（1209年没）の
クルアーン注釈書「神秘の鍵」の15世紀のアラビア語写本。